

---

# 仮面ライダー電王×侍戦隊シンケンジャー

稲妻侯爵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー電王×侍戦隊シンケンジャー

### 【Nコード】

N61210

### 【作者名】

稲妻侯爵

### 【あらすじ】

ここは、「6人の」侍が活躍する、「シンケンジャーの世界」・・・、って、この世界、何かがおかしい。その時、この世界を救うため、世界の壁を越えて、「あいつら」が「参上!」した!!

懲りずに、またまた、シンケンジャー小説です。

今度の相手は、平成ライダー空前の人気作、「仮面ライダー電王」です。

なお、この作品には、私の前作、「仮面ライダーディケイド 新たなる旅」(N1446K)内の設定を踏まえた部分がございますので、まずは、そちらをお読みいただくことをおすすめいたします。

## プロローグ

歴史、“History”の語源は、“His story”、つまり、ある人物により語られた物語、であると言われている。如何なる歴史も、語られなければ、存在しなかったことになる。これは、本来、「語られるはずの無かった」物語である……。

数限りなく存在する世界の中の、「シンケンジャーの世界」と呼ばれる世界。

ここでは、「外道衆」と呼ばれる者たちから、「侍」と呼ばれる存在が、代々世界を守ってきた。

外道衆が、再び勢力を強めたとき、侍の家系のうちの1つ、「志葉家」の18代目当主・志葉丈瑠を中心に、5人の侍が立ち上がった。戦いのなか、丈瑠の旧友の寿司屋、梅盛源太を仲間に加え、6人となった侍たちは、戦いを続け、ついに、幹部の1人、「筋殻アクマ口」を倒した。

その矢先、衝撃の事実が発覚する。

なんと、丈瑠は、真の18代目当主ではなく、「直系が絶えてしまった」ために立てられた、「代理の当主」であったのだ。

しかし、それをも乗り越え、「六人の侍」は、外道衆の大将、「血祭ドウコク」を、最も有効とされる「封印の文字」を「使うことなく」、倒してしまった。

こうして、6人の侍たちは、それぞれの生活へと戻って行った。

しかし、この世界は、既に「滅び」へと向かっていたのであった……。

## プロローグ（後書き）

はい、という訳で、この世界では、「あの人」の存在がなかったことになっています。

さて、なんでこうなったのでしょうか？

賢明な読者の方々ならば、察しはついていらっしゃるでしょう・・・。

ここで、両作品の時系列について。

シンケンジャー側は、最終回後をベースにしています。

電王側は、「さら電」まで、つまり、青年・野上良太郎が出てくる範囲を経験している状態です。

ディケイドとは、TVシリーズ最終回の一回だけ、しかも、良太郎とモモタロスだけが会ったことがあります。

私個人は、「ディケイド・電王の世界」と、「超・電王シリーズ」に出てくるのが、リ・イメージーションと解釈しています。

あと、電王側は、イメージズと、オーナー、ナオミ、コハナのみが登場します。

次回から、本編に入っていきます。

こちらの作品も、どうかよろしく願います！

六侍全員集合(ろくざむらいぜんいんしゅういっせい) (前書き)

大変お待たせいたしました。

物語は、静かに動き始めます。

ともかく、お楽しみくださいませ。

## 六待全員集合(ろくざむらいぜんいんしゅじゅう)

ここは常夏の島・ハワイ。

アロハシャツにジーパンという、カジユアルな格好をした若い女性「白石茉莉」 かつて、シンケンピンクとして戦っていた人物である。 が、道を歩いていると、後ろから、光る球が近づいてきて、なんと、彼女の背中に飛び込んだ。

その瞬間、彼女の格好が、ガラリと変わった。

束ねられていなかった髪は、後ろで束ねられ、前髪に一筋の水色のメッシュが入り、服装も、タイトスカートのスーツ姿になり、先ほどまでかけていなかったはずの、青縁の眼鏡の奥の目は、水色に変わった。

「白石茉莉ちゃん、だね？」

すると、男の声が、彼女の口を通して話した。

なんなのあなた？

まさか、新手のアヤカシ！？

「ああ、違うよ。」

今、この世界が危機にさらされているから、力を借りたくて、迎えに来たんだ。」

どういうこと？

何が起こってるの？

それに、ここはハワイよ！？

今から飛行機に乗ったって・・・ 「まあまあ、いつぺんに質問されても困るよ。」

事情は、『全員』が集まってから、にしてもらえないかな？

移動のことなら、心配ないよ。

もうそろそろ、来る頃だから・・・。」

男の声が、そう言った瞬間、空に穴が開き、中から、白いボディに、赤いプレートのようなものがついた列車が飛んで来ると、彼女の前

で止まった。

そして、ドアが、スーツと開くと、そこには、1人の紳士と、板前のような格好の若い男が立っていた……。

所変わって、京都の田舎道。1人の少女が、鉈を手に歩いていた。と言っても、別に、「かあいいもの」を「お持ち帰り」しようとしている訳ではない。

彼女は、「花織ことは」、「かつてのシンケンイエローである。

ここ、京都で竹細工職人をしている彼女は、原料の竹を取りに行く所であった。

すると、彼女の目の前に、光る球が現れると、その場で、砂の山に変わった。

その山が盛り上がったかと思うと、額から1本の角が生えた怪人の、上半身と下半身が上下逆の姿になった。

「お前が、花織ことはか？」

「はい、そうですけど……。

どちら様ですか？」

「……って、俺の姿見ても、驚かへんのか？」「いや、別に……。

悪そうにも見えへんし……。

で、何かご用ですか？」

「な、なんか調子狂うけど、まあええか……。

実はな……。」

砂の怪人が話を始めようとすると、周囲に、モグラのような姿の怪人が大量に現れた。

「くっ、モールイマジンか……。

あんまり気は進まへんけど、しゃあないか。

悪いな、『入る』で！」

次の瞬間、光る球に戻った砂の怪人は、ことはの身体に飛び込んだ。すると、ことはの服装は、黄色い着物に変わり、2つにくくられて



いた髪は、後ろで一つに束ねられ、一筋の黄色いメッシュが入る。さらに、目の色も、黄色に変わった。そのまま、砂の怪人の意識が、ことは右手を使い、彼女の腰に、銀色のベルトを巻き付けた。そして、手にしていた鉈を地面に突き刺す。続いて、人差し指で、バックルの左側についた、黄色いボタンを押すと、音楽が流れ始める。

右手は、黒く、薄目の箱のようなものを、バックルの前で、上から下に通過させた。

《Ax-Form》

すると、ことはの身体を、黒い、地味なデザインのスーツが覆う。続いて現れた黄色いパーツが、そのスーツの各部分に取り付けられ、最後に、斧のようなパーツが、マスクの、「レール」のような部分を降りて来ると、顔の前で止まり、真ん中でパツカリと開く。すると、中からは、漢字の「金」をかたどったような模様が現れた。

砂の怪人の意識は、ことはの首をコキリと鳴らすと、こう言い放った。

「俺の強さに、お前が泣いた・・・。」

これが、パワーに特化した「時の守護者」の姿のうちの1つ、「仮面ライダー電王・アックスフォーム」である。

A電王は、腰についたいくつかのパーツ「デンガツシャー」を組み立て、斧のような形にすると、

「これも借りるで！」

と言いながら、地面に刺しておいた鉈を引き抜く。

そして、右手にデンガツシャー・アックスモード、左手に鉈を持つ。A電王は、少女であることはが変身しているのが嘘のように、それなりの重さをした鉈を、片手で軽々と振り回し、器用に鉈とデンガツシャーを使い分けながら、モルイマジンたちをなぎ倒して行く。そして、おもむろに鉈を投げ上げると、先ほどの黒い箱、「パス」を腰の後ろから外し、バックルの前にかざす。

《Full Charge》

A電王は、そのまま飛び上がり、右手でデンガツシャーを握ったまま、空中で左手に鉋をつかむと、それらを二方向に構えたまま落ちて行き、Mイマジンらの頭上へと振り下ろす。

爆発により、連鎖的にMイマジンが一掃されると、A電王は、  
「・・・ダイナミック・チョップ・二刀流バージョン。」

へえ、技の名前は後から言うんや・・・。  
覚えとこ。

「いや、別に後から言う必要はないけど・・・。」  
会話が、無意識のうちに漫才風になってしまう2人。

そここうしていると、空から、先ほどと同じ列車、「デンライナー」が現れた。

それは、A電王の目の前に止まると、ドアが開いた。

電王は変身を解き、砂の怪人は、ことはの中に入ったまま、デンライナーに乗り込んだ。

すると、食堂車の中には、ことはにとって懐かしい2人の人物の姿があった。

「茉莉ちゃん！

それに、『源さん』も！」

「何だと？」

『外道衆』ではない脅威が迫っている？  
どういうことだ!？」

時を同じくして、シンケンレッドこと、志葉家18代目当主、「志葉文瑠」のもとにも、砂の怪人と、1人の少女が訪れていた。

「おう。十中八九、間違いねえな。既に、『イマジン』が、過去を変えつつある。」

庭先で、二本角の、鬼のような姿で、やはり、上半身と下半身が逆になった怪人が言う。

「そもそも、その『イマジン』と言うのは、一体何なんだ？」  
文瑠が問いかけると、

「悪いけど、さっきも言った通り、説明は、全員にまとめてさせて欲しいの。」

コハナと名乗っていた少女が言う。

その瞬間、志葉家の庭や、玄関の周辺に、わらわらと、Mイマジンが出現した。

「くっそー。おい、悪いが、お前の身体借りるぞ。」

砂の怪人は、いきなり、丈瑠の身体に飛び込む。

すると、彼の髪が逆立ち、赤いメッシュが入った。

「丈瑠」は腰にベルトを巻き、パスをかざした。

《Sword Form》

そして、黒いスーツの上から、赤い装甲が装着され、顔のレールに沿って、桃のようなパーツが顔の前にやって来ると、真ん中からそれが開いた。

「へっへっへっ、久々の、俺、参上!!!」

砂の怪人の意識が、ポーズを取りながらこう言った。

この姿は、「仮面ライダー電王・ソードフォーム」である。

「言っとくが、容赦はなしだ。」

なぜなら、俺は、最初から最後までクライマックスだからな!!!  
行くぜ、行くぜ、行くぜーっ!!!」

こう言いながら、Mイマジンの大群に突っ込んで行くS電王。

しかし、相手が多すぎ、次第に圧されていく。

「くっそお・・・。」

劣勢となるS電王。

そのとき、

「『モモタロス』くっ、僕たちも戦うけど、いいよね？」

答えは聞かないけど!!!」

「大丈夫か、オニタロス!？」

俺たちが来たから、もう安心だぞ!!!」

S電王がそちらを見ると、着物に、ラッパーのかぶるようなキャップと、ヘッドホンをつけ、髪に紫のメッシュが入った若い男と、茶

髪に、緑のメツシユが入った、少年と言うのが近い、若い男が立っていた。

「『鼻垂れ小僧』、それに『オデブ』！！  
って言うか、何度も言ってるけど、俺はモ・モ・タ・ロ・スだ！！  
いい加減覚える、オデブ！」

モタロスと呼ばれた、砂の怪人が言った。

丈瑠も、目の前の人物をよく知っていた。

『流之介』、『千明』！！

何なんだその格好は！？

そう、彼らは、シンケンブルーこと、『池波流之介』と、シンケングリーンこと、『谷千明』である。

丈瑠の意識がそう言うのと、

殿っつ、歌舞伎の稽古に行こうとしていたら、いきなりこうなっ  
て……。

お前もかよ、流之介。

俺も、予備校に行く途中でさぁ……。

その間にも、2人の身体に、砂の怪人たちが、ベルトを巻き付ける。  
そして、パスをバツクルの前で通過させる。

《Gun Form》

《Vega Form》

すると、2人の身体を黒いスーツが包む。

流之介の方は、宝玉をつかむ龍の手のようなアーマーと、龍の顔を  
思わせるマスクが装着された。

千明の方は、背中にマント、胸には、金色の顔のようなパーツが付  
き、顔の部分からは、ドリルのようなものが飛び出し、開いて、マ  
スクになった。

並び立つ2人の戦士。

まずは、紫の戦士が言う。

「お前たち、倒すけど、いいよね？」

答えは聞いてない!!」

続いて、緑の戦士が言った。

「最初に言っておく・・・、

胸の顔は飾りだ!」

「・・・」

その発言に、その場の空気が固まってしまった。

モルイマジンたちですら、動きが止まってしまったほどである。

おい、それ、今言わなきゃいけないことかよ!!

すかさず突っ込みを入れる千明。

「ああ、一応はつきりさせておこうと思って・・・。」

あくまでマイペースな性格のようである。

ともかく、戦いが再開された。

紫の戦士、「仮面ライダー電王・ガンフォーム」は、腰に付いたデングツシャーを組み立て、「ガンモード」にすると、Mイマジンたちを撃ち始めた。

隣に立っていた、「電王・ベガフォーム」も、デングツシャーを途中まで同様に組み立て、形が微妙に違う、「ボウガンモード」にした。

近距離戦向きのソードフォーム1人では対応しきれなかったMイマジンの大群も、比較的リーチの長い2戦士の参戦により、徐々に数が減っていく。

そして、頃合いを見計らい、3人の戦士は、パスを「セタッチ」した。

《《Full Charge》》

「へっ、必殺、俺の必殺技、パート2!!」

その言葉と共に、S電王の剣先が飛び上がり、残り2人の戦士の銃口には、エネルギーが充填される。

S電王は一度剣を振り下ろして横にふるい、G電王・V電王は引き金を引く。  
Mイマジンたちは、切り裂かれたり、紫の光に飲み込まれたり、撃ち抜かれ、身体に「V」の文字を浮かび上がらせたりしながら、爆発した。

僅かに残ったMイマジンは、逃走しようとするが、突如、空に穴が空き、中から電車が現れた。

電車は、Mイマジンたちの目の前に停車し、退路をふさぐ。

そして、扉が開き、

「やれやれ、敵前逃亡とは、感心しないねえ？」

「せや。逃げられる思たら大間違いや。」

「左様。」

私たちが来た以上、お前たちはここで終わりだ。」

と言いながら、青、黄、白、の各戦士が降りてきた。

「お前たち、僕に釣られてみる？」

「俺の強さに、お前が泣いた。」

「降臨、満を持して。」

電王・「ロッドフォーム」、  
「アクセスフォーム」、  
「ウイングフォーム」である。

すぐに、パスをセタッチ、必殺技を発動させる3人。

R電王は、手に持った「デンガツシャー・ロッドモード」を投げ、刺さったところにキックを放ち、A電王は、「アクセスモード」を握りながら跳び上がり、敵を両断、W電王は、「ハンドアクセスモード」を持ったまま、「ブーメランモード」を投げ、挟み撃ちにした状態で切り裂いた。

爆発が起こり、Mイマジンは、完全に倒された。

6人の戦士は、一斉に変身を解く。

これで役者はそろった。

いや、まだ1人足りない。

この事件の鍵を握る、「最も重要な人物」が、まだ・・・。

## 六待全員集合(ろくぞむらいぜんいんしゅじゅう) (後書き)

はい、今回は、6人が集まるところまでです。

ことのはの、鉈がらみの「アレ」は、つい入れてしまいました。

あの作品が好きなもので……。

まあ、個人的には、ことのはは、むしろ「お持ち帰り」される側だと思えますが……。

ところで、あの作品の「実写版」って、なんとなく、特撮感のあるキャストさんが多いような……。

「カメラマン」は、「救急5兄弟」の次男ですし、「医師」も、「ときめき」のあの人、「刑事」だって、2作目の方では、「うがい」で変身する、「大シヨツカー幹部」のあの人……。

極め付きは、「委員長」。

「エコの街」を支配する「ファミリー」の次女で、名字の読み方まで同じです。(こじつけくせえな……。)

閑話休題。

さらっと、新フォームの登場です。

さすがに、ゼロノスではリスクがデカ過ぎますからね。

「鬼ヶ島」で「幸太郎」に憑いていたので、アリかなあ……、と思っただけです。

違いは、ベルトと、ゼロガツシャーがデンガツシャーに変わったことぐらいです。

さて、次回の3つのポイントを、オースの前回の振り返り風に……。



- 1つ、今回入らなかった「源太 in Paris」(笑)!
- 2つ、オーナーによる説明!!
- 3つ、今回の物語における「キーパーソン」の登場!!!

という予定です。

ゲストも登場します。

今話題の「あの人」、だったりなんかしちゃったりして……。

(まだるっこしい言い方はやめる。)

ヒントは「パリ」、「迎えに行ったのがジーク」、といったところ  
でしょうか……。

あっ、ゲストとジークの絡みはありませんが……。

「キャラが近い」だけに、話してみると、噛み合わなさそうで、意  
外と噛み合うかもしれないね。

ともかく、次回もお楽しみに!!

過去(きのう)を失くした少女(前書き)

大変お待たせいたしました。

今回は、シンケンメンバーがデンライナーに行きます。  
とにかくお楽しみください。

## 過去(きのう)を失くした少女

6人が、再会を言っていると、ステッキを持った壮年の男性が降りてきた。

「皆さん、どうぞ、『デンライナー』の中へ。」  
男性に促されるまま、乗り込む6人。

ドアが開くと、そこは、食堂車らしきところで、六体の、カラフルな異形が、奇抜な色の泡が浮かんだ飲み物を飲んでいて、彼らは、なんと、それをコーヒーだと言うのだ。

6人の侍たちは、今までの常識を遥かに超えた出来事の連続に、度肝を抜かれていた。

とりあえず、6人が空いた席に腰を下ろすと、

「コーヒーいかがですか？」

白い、近未来的な服で、手足に大量の腕時計を付けた、前髪にピンクのメツシユの入った女性が、カップ6つとポットをトレーに載せてやって来た。

「い、いえ、私たちは結構……。」「  
流之介が断る。

「おゝい、『ナオミ』、おかわりくれー。」

すると、赤鬼のような異形が、空っぽになったカップを上げて女性を呼んだ。

「はいはい！」「

女性は、「赤鬼」の方へと行ってしまふ。

「彼女はナオミ君、この『デンライナー』の食堂車で働いてくれている乗務員です。」

申し遅れました、私は、このオーナーです。」

ステッキを持った紳士が近づいて来て、自己紹介をする。

続いて、

「コハナです。よろしく願いします。」

と、先ほど志葉家を訪れた少女が自己紹介した。

すると、奥にいたカラフルな異形たちも、

「俺はモモタロスだ。」

「僕はウラタロス。」

以後お見知り置きを。」

「キンタロスや。」

よろしゅう頼むで。」

「僕リユウタロス。」

仲良くしてくれるよね？

答えは聞いてない!」

「ジークだ。」

皆の者、よろしく頼むぞ。」

「はじめまして。」

デネブです。

良かったら、これどうぞ。

手作りのデネブキャンディーです。

お口に合うか分からないけど……。

『侑斗』に食べてもらうために作った、椎茸味だから……。」

赤、青、黄、紫、白、緑、の順番に名乗る。

ちなみに、デネブの最後の発言を聞くと、飴を口に放り込もうとした6人の手が止まってしまった……。「……と、ともかく、源太は、もろもろの準備があつて、日本を出発したのが昨日だったから、久しぶりという気はしないな。」

やっぱり、今回の件が終わったら、パリに戻るのか？」

沈黙を破るように、話題を転換する丈瑠。

「……。」

すると、源太は、なぜか俯き、黙り込んでしまった。

「おいおい……。」

どうしたんだよ、源ちゃん？」

不思議そうに尋ねる千明。

しばしの沈黙の後、源太は、ぼつぼつと語り出した……。

「やっと来たぜ、パリっ！！」

シャンゼリゼ通りの真ん中で叫ぶ源太。

彼の声に振り返ったパリっ子たちは、彼の、金色の板前姿に、コック帽（パリはフランスであるにも関わらず、なぜか、赤と緑というイタリアンカラーのライン入り）という奇抜な服装に、あわてて目をそらして立ち去っていった。

「ちえっ……。」

まあ、予定通り、フランスの、日本料理のレベルを確かめに行くか……。」

そう言うのと、源太は、裏通りに入っていた。

以前から評判になっている、日本料理店がそこにあるのだ。

彼は店を見つけ、中に入ると、席に着いた。

すると、

「あれ？」

すいません、俺、まだ何も頼んでないですけど？」

いきなり、1人の男が、器に入った鯖味噌を運んできた。

「注文？」

そんなものは必要ない。

この店にあるメニューはただ1つ。

『俺の作る料理』、それだけだ。

まあ食べてみる、食べれば分かる。」

すると、料理を運んできた、作務衣の若い男が、人差し指を上に向けてながら言った。

自信満々な男の様子に、鯖味噌を一口食べてみる源太。その瞬間、

「う、う、うまあーい……！」

何なんだよこれ、調味料の味はきっちり立ってるのに、個性がケン

カしてる訳じゃない。

むしろ、新たな旨味が生まれてるじゃねえか……。

それ以上に驚きなのが、鯖の臭みが完全に消えてることだ！

こんな鯖味噌、日本でも食ったことがねえよ！！

うまい、うまい、うますぎるぜえー！！！！

「ふふふ……。」

当たり前だ。

おばあちゃんが言っていた……。」

気が着いた時には、源太は、財布の中身を残らずテーブルにぶちまけ、店を飛び出し、走り去っていた。

源太が去って行った店には、こんな看板が掲げられていた……。

「料理の店・『天の道』」

「ふーん。でも、そんなにおいしかったなら、目標ができて良かったんじゃないの？」

「違うよ、逆なんだよ、菜子ちゃん。あれを食って分かったんだ。

世界に殴り込みなんてことをするのは、まだ早かった。

俺は、まず日本料理を極める。

世界は、それからだ……。」

「と、この者が決心した直後、私が合流したという訳だ。」

最後に、ジークが言葉を添えた。

こうして、話がまとまったところで、丈瑠が、オーナーの方を向いて言った。

「さて、これで全員揃った。そろそろ、『事情』ってやつを説明してくれてもいいんじゃないか？」

すると、オーナーは、口元に微笑を浮かべながら、

「ええ、もちろんです。」

ですが、その前に紹介しておかねばならない人がいます……。」  
と言うと、丈瑠たちが入ってきたのとは逆側の扉の方を向いて、

「どうぞ、お入りください。」

と呼び掛ける。

すると、扉が開き、白い服に、黒いスカートという格好の、ことはよりも更に年下と思われる少女が入ってきた。

「これで、本当に全員が揃いました。

さて、話を始める前に、シンケンジャーの皆さんに1つ確認を……。

あなた方は、『ディケイド』に会ったことがありますね？」

「はい、そうですね……。

まさか、その子も、ディケイド絡みなんですか？」

茉莉が尋ねると、

「いえいえ、そういうことでは……。

ただ、彼らを知っているなら、我々が、『別の世界』からやって来たということをしぐ理解していただけに思っただけのことです。」

「別の世界!？」

「……まあ、ディケイドだけじゃなくて、『ゴロンジャー』っていうのにも会ったことあるし、確かにあんまり抵抗はないよな……。

」

千明が言う。

「では、話を続けることにしましょう。

本来、我々がいた世界は、『電王の世界』と呼ばれるところでした。しかし、『ある出来事』をきっかけに、こちらの世界に飛ばされてしまったのです……。」

オーナーは、「シンケンジャーの世界」にやって来た事情を、ゆっくりと話し始めた……。

「ねえねえ、みんなは、どのモルスーツが好き？」

僕は、やっぱり、イン〇ルスとデ〇ティニーかな？」

今日も今日とて、ガン〇ムネタで盛り上がるデンライナー。

「ふっ、デュ〇ミスとケ〇ディムに決まっているだろう。」

お供その2、お前はと思うっ?」

「その言い方、やめて欲しいんだけど・・・。  
そうだなあ、強いて挙げるなら、コル〇ルかな？」

あの、白一色っていうのが、シンプルでカッコいいと思ってさ。  
キンちゃんは・・・、寝てるから飛ばして、先輩はどうなの？」

「俺か？」

・・・うーん、プロヴィ〇ンス、いや、デ〇サイズも捨てがたいよ  
な・・・。

ん？

悪い、良太郎だ。」

ジーク、ウラタロス、モモタロスの順番に発言し、モモタロスは、  
仲間である、「野上良太郎」が話しかけて来たために、車両の端に  
行ってしまった。

「そうだ、オデブちゃんはどう思う？」

ウラタロスが、デネブに尋ねると、

「俺は、俺は、ゼー〇は大嫌いなんだあー!!」「うつせえな、オ  
デブ、静かにしてる!!」

大声で叫ぶデネブは、モモタロスに注意されてしまった。

「でも、何でそんなにゼー〇が嫌いななの？」

リュウタロスの問いに、

「だって、あの最終決戦のピンク色のビームとか反則でしょ!!」

あれで、ハン〇ラピを瞬殺って・・・。」

と、そこまで言ったとき、

ガタガタ、ガタガタ!

突如、デンライナーが揺れ始めた。

そして、進行方向に、いきなりオーロラのようなものが現れると、  
その中に突っ込んでいってしまった・・・。

揺れが収まると、



「おい良太郎、良太郎！」

「……だめだ、つながらなくなった。」

モモタロスが呼び掛けるも、良太郎からの応答はない。

すると、食堂車の中に、またオーロラが現れ、中から、茶色い服装の男性が出てきた。

「手荒な真似をして、本当に申し訳ない。」

「ほう、あなたは確か……、『鳴滝さん』、でしたね？」

「鳴滝？」

どっかで聞いたな……。

ああ、『渡』の言つてた、ディケイドの『ストーカー』つて奴か！  
！」

「バ、バカな！」

何で私が、あのようなやつをストーカーしなければならぬ！？

……、全く、こんなバカ話をしている暇はないんだつた。

手短かに説明させてもらおう。」

モモタロスのとんでもない発言に、声を荒らげながら否定する鳴滝は、なんとか冷静さを取り戻した。

「実は、ある人物が、この世界の『時の運行』の中からこぼれ落ちてしまった。」

このままでは、その人物の存在は完全に消えてしまう。

だから、その人物を、この、『時の狭間』で繋ぎ止めておくため、デンライナーを移動させてもらったという訳だ。」

「なるほど。」

しかし、普段は、他の世界からの干渉を嫌うあなたが、わざわざ別世界から我々を呼び寄せるということは、その人物、ただの一般人ではない、ということですね？」

オーナーが尋ねる。

「まあ、そういったところだな。」

とにかく、『彼女』に入ってもらおう。」

鳴滝が言った瞬間、再びオーロラが現れ、中から、汚れた着物を着

た少女が現れた。

「この娘が、重要人物なの？  
きみ、名前は？」

ウラタロスが少女に話しかける。  
しかし、

「ご、ごめんなさい。」

わたし、わからないんです。

名前も、どこから来たのかも、思い出せないんです……。  
少女は、申し訳なさそうに答える。

「ほお、『記憶喪失』ってやつぢやな……。」

いつの間にか目覚めた、キンタロスが呟く。

「ねえ、『納豆巻き』は、この子が誰か知ってるんでしょ？」

「納豆巻きじゃなくて、鳴滝だ！！」

ああ、確かに、何者かは分かっているが……。」

名前を呼び間違えるリュウタロスに突っ込みながら答える鳴滝。

「ならば、教えてやれば良からうに……。」

ジークが呟くと、

「ジーク君、『記憶』というものの取り扱いは、そう簡単にはい  
かないんです。」

今回のようなケースでは、記憶喪失は、その世界の『時の運行』の  
乱れが原因であることが多いんです。そういう時は、運行が正常に  
戻れば、それに伴って記憶も戻ります。

まずは、時の運行の乱れの原因を探ることが先決でしょう。

解決しても、記憶が戻らなかつたら、その時に素性の説明をすれば  
よいのではないのでしょうか？」

オーナーが、丁寧に説明する。

「では、申し訳ないが、私は失礼させてもらいたい。

後のことは、よろしく頼んだ。」

鳴滝は、そう言って、オーロラの中へと去っていった。

「まったく、言うことだけ行って行ってしまうなんて……。」

とにかく、着物が汚れていたら気持ち悪いだろう。

ナオミちゃん、コハナちゃん、着替えはないかい？」

デネブがそう言うと、女性陣は、少女の着替えを探しに行った。

「さて、呼び名がないと不便でしょう。」

皆さん、何かいい案はありませんか？」

オーナーが、イマジンたちに問いかける。

彼らは、しばし沈黙しながら、名前を考える。

そして、何気なく窓の外を見ると、昼夜の区別がないはずの「時の砂漠」に、珍しく月が出ていた。

「そうだ。」

『ルナ』なんてどうかかな？」

ウラタロスが思い付いた名前を口にする。

「いかにも、助平亀らしいセンスだな。」

・・・でも、悪くないな。」

モモタロスは、憎まれ口を叩きながらも賛成する。

「何やねん、桃の字も素直やないな。」

「そうそう。」

最初っから、いって言えばいいのに。」

「うるせえ。」

キントロス、リュウタロスの言葉に、照れ隠しにぶっきらぼうな言い方をするモモタロス。

「まあ、いいじゃないですか。」

では、ルナ君で決まりですね。」

オーナーがまとめる。

「・・・ということですよ。」

「幸い、前に私が着ていた服が残ってたから、それを着てもらっています。」

オーナーの説明のあとに、コハナが付け加えた。

侍たちは、コハナが以前着ていた服が、どうしてルナが着られるサ

イズなのか、疑問に思ったが、また、自分たちの常識の範囲を越えた事情があるのだろう、と納得しておくことにした。

「オーナー、頼まれたもの、持ってきましたー！」

そこに、ナオミが持ってきたのは、ルナが着ていたと思われる着物であった。

「皆さん、ここを見てください。」

オーナーが、着物の一部分を指差す。

そこに描かれていたのは、折り紙の兜を象った印、そう、

「これは、志葉家の家紋！？」

「やはり、それで間違いないんですね。」

オーナーが確認するように言う。

「私たちは、この家紋を手がかりに、あなたたちにたどり着きました。」

これで、彼女が志葉家の関係者であるという可能性が高くなりました。

「コハナが言うと、

「でも、最近侍になった俺はともかく、丈ちゃんも、誰だか分かってないみたいだけど・・・？」

「いえいえ、我々は、別にルナ君が誰であるかを調べようとしている訳ではありません。」

皆さんに頼みたいのは、『契約者』探しのお手伝いです。」

「契約者？」

丈瑠の問いかけに、

「そもそも、この世界の異変の原因は、本来存在しないはずの『イマジジン』という怪人が現れたことにあります。」

イマジジンは、人間を見つけると、こう囁きかけるのです、

『お前の望みを言え、どんな望みも叶えてやろう・・・。』

こうして、その人物の願いを聞くことで、『契約』を交わします。

そして、イマジジンは、その願いを実現するための行動をします、とはいえ、早く契約を完了させるための、やっつけ仕事である場合が

ほとんどですが。

そうして、契約を完了させたイマジンは、契約者の最も印象に残っている過去の時間に『飛び』ます。

そして、その時間をイマジンのものにするために暴れるのです。「なるほどな。」

デイケイドじゃないが、大体分かった。

あの少女が志葉家の関係者ということとは、その契約者も、志葉家に何らかの関わりがある、と考えても何ら不思議はない。「文瑠が言つと、

「ちよつと待つて下さい！」

私たちに、志葉家の関係者を疑え、とおっしゃるんですか!？」

「流之介！」

落ち着きなさいよ!!」

必死で流之介をなだめる茉莉。

「流之介、俺たちがするのは、関係者を疑うことじゃなくて、その疑いを晴らすことじゃないのか？」

千明が諭すように静かに言う。

「すごいわ、千明。」

大人になったやん。」

「ことは、それをお前に言われるとなぜか複雑な気持ちになるんだけど……。」

「もう、ひどいわあ。」

ぷつと頬を膨らませることは。

一同は、しばし笑顔になる。

そして、流之介がいきなり真顔になると、こう言った、

「殿、私は決めました。」

この世界を守るためなら、私は、鬼にだってなってみせます!!」  
しばらくシリアスな雰囲気になる車内。

しかし、

「おい、そのセリフは十分カッコいいぜ。  
でもなあ、俺の顔見ながら『鬼』とか言ってんじゃねえぞコノヤロ  
ー!!!」  
モモタロスの一言でその空気がぶち壊しになってしまった。  
再び爆笑に包まれる食堂車。

「まあ、とにかく探しに行こうぜ!」  
源太が、仕切り直すように威勢良く声をかける。  
「待て。」

イマジンについては、俺たちの専門分野だ。」  
モモタロスが、出発しようとした侍たちを引き留める。  
「茉莉ちゃん、またよろしくね。」  
と言いながら茉莉に憑依しようとするウラタロス。  
しかし、茉莉はすつと身をかわす。ウラタロスは、勢い余って、茉  
子の後ろにいたことは憑依してしまった。たちまち、ことは服  
装が、茉莉と同様のタイトスカートのスーツ姿に変わる……。

「こら千明、みつともないぞ。鼻血なんて出して。」「おいおい、  
流之介、人のことは言えないだろ。」

お前も鼻血出てるじゃねえか。

「……ああもう、源ちゃんまで。」

「仕方ねえだろ!」

あのロリ系の顔で、エロカッコいいタイトスカートは、正直反則だ  
ぜ!!!」

茉莉ちゃんじゃ、意外性無さすぎで、こっちは行かないよなあ。

「……って、おい、嘘だろ、あの丈ちゃんが鼻血を出すなんて……  
」

「お前ら、あんまりジロジロ見るな。恥ずかしいだろ。」  
鼻血を出す男性陣に、茉莉やコハナ、ナオミは、密かに、「男って・

・・。「と、情けない気持ちになっていた。  
その様子を見ながら、鼻血をこっそりぬぐうオーナーであった・・。  
。

## 過去(きのう)を失くした少女(後書き)

今回、シンケン男性陣のギャップ萌えをあまりにも強調しすぎて、なんだか茉莉ちゃんが霞んでしまいました。

申し訳ありません。

それにしても、オーナーまでも鼻血を流す、Uことはの「破壊力」、恐るべしですね。

ちなみに、私個人としては、制服などの、ロリ系コスプレが好きです。

(何のカミングアウトだ。)

今回は、イマジンたちに、ガンダムネタ(あまりあからさまに書くのもアレなので、一部伏せ字にしています)を言わせてみました。

一応、「中の人ネタ」なのですが、ウラタロスの話に出てきたMSは、「X」に登場する、らしいです。

らしい、と言うのは、Xは見たことがないからです。

てらそまさんだけは、ガンダム関係のお仕事で、調べても見つけられなかったので、キンちゃんだけ寝ています。

キンタロスファンの皆さん、すみませんでした。

「パリの料理人」は、あくまでこの世界における「彼」で、単なる天才料理人に過ぎません。

ですから、「太陽の神」にはなりません。

今回は、源太に、世界の厳しさを教えるために登場しました。

まあ、あの料理は、世界レベルどころではないでしょうが……。

さて、最後のキーパーソン、ルナが登場しました。



果たして、彼女の正体とは!?

(まあ、バレバレですけどね。)

ここで、次回予告を・・・。

今回は、契約者探し、そして、過去に向かうあたりまで行ければいいかなと思っています。

契約者は、少なくとも、私オリジナルのキャラではありません。

さらにその次には、また「外伝」を入れたと思います。

内容は、「電王の世界」を舞台に、凶二が、再びシンケンジャーの世界に現れるまでの出来事を補完する、という感じにしようと思っています。

その中で、電王サイドの人物をあと「2名」登場させて、凶二との絡みを作ろうと思っています。

とにかく、次回もご期待ください!!

探索契約者（さがせけいやくしゃ）（前書き）

大変お待たせしました。

今回は、ちよつと短いですが、どうかご了承ください。

ついに、契約者の正体が明らかになります。

また、ちよつと懐かしい名前をいろいろ出してみました。  
楽しんでいただければ幸いです。

とにかく、ご覧ください。

探索契約者（さがせけいやくしや）

「ぐああー！」

「！」

貴様、 何をする！？」

「何を言っている。」

これでお前の望み通りになった。」

「バカな！」

私は、こんなことを望んだんじゃ……。」

「黙れ。」

『契約完了』……。」

「殿、お帰りなさいませ。」

ん？

何ですか、その鼻ティッシュは？

流之介に千明、源太まで……。」

鼻にティッシュを詰めて戻ってきた男性陣に、怪訝そうな顔をする彦馬。

「まあ、色々あつてな。」

そう言う丈瑠の表情は、どこかばつの悪そうなものだった。

よく見ると、流之介たち、残りの3人も同じような顔をしていた。

そして、菜子は、口元には笑みを浮かべているのに、なぜか目は笑っていないかった。

1人おろおろすることはの姿を見ながら、彦馬は、これ以上事情を聞いてはならないことを肌で感じ取った。

すると、そこに、先ほど屋敷にやって来た少女と、それよりは少し年上の少女、ステッキを持った男性が、6つの光る球を従えながら

屋敷に入ってきた。

「失礼します。」

私は、『デンライナー』のオーナーをしている者です。」  
男性はそう言うと、事情を説明し始めた。

「・・・なるほど、そう言うことだったのですか。」

私も、喜んで協力いたします。」

事情の説明を聞き終えた彦馬が答え、奥へと引っ込んでいった。  
そして、手に紙の束を持って戻ってきた。

「これが、志葉家に関わりのある人物や団体のリストです。」

すると、流之介がそれを手にして、

「じゃあ、手分けして探しに行きましょう。」

と言うと、

「飲食関係は俺に任せてくれ。」

ちよつとは顔が利くからよ。」

源太が、ジャンル分けされたうちの、「飲食店」の部分を手にとった。

そして、残りのリストを、流之介と千明が3つに分けようとする。

「俺は屋敷に残って、情報をまとめる。」

何か分かったら、すぐ俺に連絡を入れる。」

と丈瑠が言ったため、2人は、リストを半分ずつに分けると、流之介と千明と千明と菜子、源太という3組に分かれて屋敷を出ようとする。

「待つてください。」

モモタロス君たちは、世界の境界を越えたせいか、このように実体が保てなくなっています。

ですから、彼らが『入って来る』ことがあるのを理解しておいて下さい。」

とオーナーが5人に声をかける。

「了解しました。」

頷きながら、5人は屋敷を出ていった。

「すみません、つかぬことをお伺いいたしますが、最近、志葉家に  
関して、何か変わったことをお聞きになりませんでしたか？」

「いえ、特には……。」

流之介が尋ねるが、有力な手がかりは得られない。

「手がかり、なかなか見つからへんなあ……。」

ことはが呟くと、

ダメダメ、そんな堅苦しいしゃべり方じゃ。

それじゃ、手に入る手がかりも、手に入らなくなるよ。

僕に任せて。

と言いながら、ウラタロスは流之介に憑依する。

既に着物から着替えていた洋服が、スーツへと変わり、眼鏡をかけ  
たU流之介が、そばにいた若い女性に話しかける。

「ねえ君、志葉家について、なんか噂を聞いたことない？」

「ごめんなさい。」

分からないです。」

「そう……。」

時間取らせてもらってゴメンね。

お詫びと言ってはなんだけど、食事に誘いたいから、アドレス教え  
て……。」

槌

話が脱線したのを見て、すかさず、ことはが、モチカラで出したピ  
コピコハンマーで、U流之介の後頭部を叩く。

ピコンー!!

「ウラちゃん、そんなことしてる場合とちゃうやろ。ほら行くで。」

「あーあ、仕方ないなあ……。」  
しぶしぶと言った感じで、女性から離れていく川之介であった……。

「殿、『小津家』、『サージエス財団』、『スクラッチ』、全部心当たりはないそうです。」

「そうか。」

「ご苦労だった。」

流之介から報告を受けた文瑠は、電話を切る。

プルルルルル。

「もしもし丈ちゃん、『恐竜や』、『芋長』、『スナック・ゴン』、全部ハズレみたいだ。」

「ありがとう、源太。」

電話を切る文瑠。

「……ふう。」

千明と茉莉が調べに行った、『トウモロリサーチ』、『獅子動物病院』、『忍風館』、『宇宙警察地球署』も違うようだ……。」  
と、文瑠が呟くと、

「殿、あとは『これ』だけです。」

できれば、これは使いたくなかったのですが……。」

彦馬が持ってきたのは、黒子などの、志葉家の「使用人」たちのリストであった。

そして、そのリストは、一旦戻ってきた5人に分配された。

しばらくして、

プルルルルル。

「もしもし。」

千明か。

なに、可能性のある人物がいた？

場所は？

・・・なるほど。

で、名前が・・・、うん、『丹波 歳三』。」

その名を聞いた瞬間、彦馬の表情が変わる。

「分かった。」

俺もすぐに・・・「お待ちください、私も参ります。」何だと？

・・・、まあいいか。

ジイもそっちへ行くそつだ。

俺たちが行くまで待つている。

他の奴らにも連絡しておくから。」

と言つと、丈瑠は電話を切った。

「それで、その『丹波』というのは、どんな人物なんだ？」

彦馬の方を向いて尋ねる丈瑠。

「はい、かつては、この志葉家の家臣の中でも主要な人物の1人でした。」

代々の当主の側に仕えてきたのですが、『あの日』の出来事をきっかけに姿を消してしまつたのです・・・。」

「『あの日』？」

・・・まさか!？」

「ええ、あの、『血祭ドウコク』が屋敷を襲つた夜、混乱に乗じて、正体不明の『アヤカシ』と思われる怪物が、彼の目の前で奥方様を・・・。」

責任を感じた丹波殿は、その日以来行方が分からなくなっていたのですが・・・。」

「とにかく、千明たちと合流しよう。」

丈瑠たちは、屋敷を出ていった。

「それにしても、よくここを突き止めたな。

名簿には、この住所はなかったんだろ？」

源太が、千明と茉莉に尋ねる。

「うん、これには、古い住所しか載ってなかったんだけど、その近所で聞き込みして、なんとかここまでたどり着いたんだ。」

千明が、少し自慢気に答える。

「すごいじゃないか、あの千明が、こんなに忍耐力のいることを……」

「流さん、それはさすがに千明に失礼やで。」

ことはがそう言うのと、

「みんな、遅れてすまなかった。」

丈瑠と彦馬、イマジンたちがやって来た。

全員がそろったのを確認し、茉莉が、丹波の家の玄関扉を叩いた。

「丹波さん、丹波さん？」

「……おかしいな、近所の人の話では、ここしばらくは、一度も外に出てないはずなのに……。」

あかんあかん、そんなんやったら出てけえへん。

俺に変われ！

と言いながら、キンタロスが茉莉に憑依してしまった。

茉莉は、黄色い着物を、片方の肩を出して着て（中にはさらしを着用）、黄色いメッシュの入った髪を結った姿へと変わり、

中におけるのは分かっつとるんどすえ。

早いとこ開けなはれ。

と言いながら扉を叩くのは逆の手には、白木の鞘に入った短刀トスが、いつでも抜けるようにして握られていた。

「いやいや、それじゃ逆効果だろっ！」

てか、キンちゃんも、なんでそんな、どこかの組の姐あねさんみたいなしゃべり方なんだよ!？」

「千明、別にヤクザさんがみんな京都弁しゃべってる訳やないで。」



千明がキンタロスにもものすごい勢いで突っ込みを入れ、ことはが、京都の人間として黙っていられなかったのか、やんわりと指摘した。そんなやり取りをしている横から、丈瑠が扉に手をかける。すると、扉に鍵はかかっていたいなかった。

「おいおい、まさか、中で死んでるとかないよな……？」

源太が呟くと、

おい、そりやまずいぞ。それだったら、イメージがどの時間に飛んだか分からなくなっちゃう！

モモタロスの言葉をきっかけに、一同は、あわただしく家の中に入っていく。

部屋の中では、和服を着た初老の男性が倒れていた。

「丹波殿！」

しっかりして下さい！！」あわてて男性を抱き起こす彦馬。

「う、ううん……。」

く、日下部！

なぜここが分かった!？」

彦馬の顔を見て驚く丹波。

「そんなことより、変な怪物をご覧になりませんでしたか？」

「はっ！」

し、信じてくれ、私は、私は、叩かれたくなかったただけなんだ!!」

「落ち着いて下さい。」

誰に叩かれたくなかったんですか!？」

問いかける流之介に、

「……分かん！」

それが思い出せんだ!!」

悲痛な叫びをあげる丹波。

ふむ……。

イメージの『歴史改変』の影響が出始めているのかもしれないな。ジークが言う。

まあ、生きてた訳だし、早速、いつに飛んだか調べるか。丈瑠、悪いが身体、『借りる』ぜ。

と言うと、モモタロスが丈瑠に憑依し、チケツトを丹波にかざす。

【1995：8/23】

「おいおっさん、この日付に、なんか心当たりねえか？」

M丈瑠にチケツトを見せられた丹波の顔色が変わる。

「こ、これは……。」

横から覗き込んだ彦馬も、驚いたような顔をする。

「間違いない、『血祭ドウコク』が屋敷を襲撃した日だ。」

彦馬が静かに言ったその時、

フーン！！

警笛を鳴らし、デンライナーが、家の前に停車した。

「皆さん、早く乗って下さい。」

急いで過去へ向かいます。」

オーナーの言葉に従い、丹波に付き添うことを決めた彦馬以外が乗り込んだ。

デンライナーは、空に穴を開けて、飛び去っていった……。

それを見送り、彦馬は、人知れず呟いていた。

「『あのお方』が生きておられれば、ちょうどあの少女ぐらいに……、いや、まさか、そんなことがあるわけが……。」

《1995年8月23日》

「奥方様、こちらへ！」

火の手の上がる屋敷の中、丹波が、お腹の大きい女性を案内していた。

「丹波様、私には、『主人』とその家臣たちを見捨てることはできません。」

「奥方様」はそう言うが、

「何をおっしゃるのです！」

今や、あなた1人のお身体ではないのですぞ！！

志葉家の『希望』を護ること、それこそ、我々が『お館様』から仰せつかったこと。」

「・・・そうでした。」

私が軽率なことをしてはならないのでしたね。

丹波様、よろしくお願いします。」

丹波が、奥方様を連れて逃げてしていると、

「・・・うつ！！」

丹波の身体から、砂がこぼれ落ちたかと思うと、ムカデを思わせる異形になった。

「丹波様、丹波様！？」

その場でうづくまる丹波の元に駆け寄る奥方様。

すると、その異形、「センチピードイマジン」が、毒針のついた腕で、奥方様に向かって鋭いパンチを繰り出す。

その拳は、あやまたず、彼女の心臓をとらえていた・・・。

「奥方様あー！！！」

探索契約者（さがせけいやくしゃ）（後書き）

はい。

なんとか、過去に行くところまでこぎつけました。

最近、少し忙しいため、早く更新しようとするあまり、内容が薄く  
なってしまったこと、お詫びいたします。

過去へ向かったシンケン&電王メンバーの活躍は、2回後をお楽し  
みに。

今回は、以前の予告通り、外伝をお送りします。

さて、内容について。

なんか、今回は、ことはが突っ込みポジションになりましたが、イ  
マジンスのボケ（？）の前では、ことはとはいえ、突っ込まざるを  
得なかった、ということにしておいてください。

あと、聞き込みで、「スクラッチ」は、ことは&流之介の担当だっ  
たため、茉子ちゃんが、「美希さん」（あくまで、この世界におけ  
る、ですが）を、自分のお母さんと勘違いする、という展開はあり  
ませんでした。

いやあー、実に惜しかった!!

（そう書いたのはお前だろ。）

まあ、あの時は、ハワイから来ていたお母さんに、全員が会ってい  
ましたけど・・・。

今回は、ことは、流之介、共に気づかなかったということ。

最後に、ドウコクの志葉家襲撃の日付は、「約15〜20年前」と  
いう設定しかないようなので、適当に決めましたが、何か他の設定  
とかは、なかったですよ？

何かご存知の方がおられれば、是非お教え下されば幸いです。

今回は、外伝で、久々に、凶二が登場しますよ。

あの、電王メンバー2人も出てくるので、お楽しみに！！

外伝「Reaper/Leaper

刈り取る者と時間

とき

を翔ける

お待たせいたしました。

今回は、凶二の「秘密」が、1つ明らかになります。

とにかく、ご覧ください。

数限りなく存在する世界。

その中の1つ、「電王の世界」にある喫茶店、「ミルクディッパー」。

今日は、「Closed」という札がかけてあるものの、中からは2人の若者の声が聞こえる。

カウンター席に腰かけた、茶髪の若者が、コーヒーを一口飲むと、目の前に立つ、黒髪の若者に話しかける。

「『野上』、話があるっていつのは何だ？」

すると、野上と呼ばれた若者が、茶髪の若者の耳元で何かをささやいた、

「・・・はあっ!？」

『デンライナー』がいなくなった!？」

「『侑斗』、あんまり大きな声は・・・、

「何ですって、それ、本当なんですか!？」

えっ、君、誰？」

「野上」が「侑斗」の大声をたしなめようとした時、いきなり、店の入口から、眼鏡をかけた青年が入ってきた。

ここで、眼鏡の青年、「刈谷凶二」の立場から、ここを訪れた事情を説明しよう。

「さて、次はどの世界かな・・・？」

凶二は、そう呟きながら、大鎌の形をした、「デイルンドライバー」を一振りする。

すると、空間に穴が開き、凶二はそれをくぐる。

別の世界の路地裏に出た凶二は、ここはどの世界かを調べることに

した。

そうして、ある喫茶店の前を通りかかると、

「はあっ!？」

『デンライナー』がいなくなった!？」

という言葉が中から聞こえてきた。

「デンライナー？」

なるほど、『電王の世界』か。」

と呟いた凶二は、閉店の札を気にもせず、喫茶店の中に入ってみることにしたのだ。

「お前、何者なんだ？」

なぜデンライナーを知っている!？」

侑斗が不審そうに凶二に問いかけるが、

「キヤー!！」

そこに、外から女性の叫び声が聞こえてきた。

「・・・話は後だ。

行くぞ、野上。」

侑斗は、野上を伴って、叫び声が聞こえてきた方へと走って行く。

凶二も、その後ろを追いかけて行く。

3人が声のした所にたどり着くと、今まさに、モルイマジンが、若い男性の過去に飛ばうとしているところだった。

「待て!

変身!！」

《Charge&Up》

《Liner Form》「Kamen Ride Dir

ondo」

侑斗の言葉をきっかけに、変身する3人。

「その姿は・・・。」

まさか、『ディケイド』の仲間なんですか?」

「電王は、ディロンドの姿を見て、問いかけた。



「えっ？」

「デイケイドをご存知なんですか!？」

などとデイロンドが答えている間に、Mイマジンは過去に飛んでしまった。

「おい、どうすんだよ。」

デンライナーは行方不明、ゼロライナーもメンテナンスが済んでない。

今の俺たちに、過去に行く方法はないんだぞ!!」

ゼロノスが声を荒らげると、

「・・・方法ならありますよ。」

ただ、あなた、ええつと・・・、「野上、『野上良太郎』です。」

野上さんのご協力が必要ですが。」

デイロンドが静かに口を開く。

「もちろん、イマジンを倒すためなら、協力します。」

「電王が答えると、

「では、まずはチケットを。」

と言うデイロンドの言葉を聞いて、ゼロノスが、青年の額にチケットをかざす。

【2009:12/15】

「この日付に何か心当たりは？」

チケットを見せながら青年に尋ねるゼロノス。

「こ、これは・・・。」

僕、雲野リヨウって言います。

実は、この日に、ここにいる、蟹山かにやまレナ 僕の彼女だったんですが

とケンカしちゃって・・・。

で、ずっと、会って謝りたいと思っていて、そんな時、あの化け物が現れたんです。

それで、望みはないか、って聞かれてつい、そう言ってしまったら、無理やり彼女をここに連れて来たんです。」

青年、リヨウの言葉に、

「なるほど。」

「そうだったんですか。」

とデイルンドが答えると、

「では、野上さん、心の準備はいいですか？」

「えっ!？」

「ちよ、ちよつと、何をするつもりなんですか？」

声のトーンが焦ったものになる。電王。

しかし、それを気にも留めず、一枚のカードをドライバーに差し込むデイルンド。

「Final Form Ride De De De

Den・O」

「くれぐれも、脱臼には気をつけてくださいね。」

と言うと、ドライバーの刃が電王の身体を通過した。

すると、彼の身体が宙に浮かび上がったかと思うと、関節が、普通ではあり得ない角度で曲がり、みるみる、デンライナーに似た形へと変わっていく。

そして、その変形の最後に、

「コキッ！」

という軽い音がした。

「おい、野上、大丈夫なのか!？」

あわててゼロノスが問いかけると、

「ああ、平気平気。」

多分関節が抜けた方が無理な力が逃げるみたいだし。

それに、脱臼だったら、もう馴れてるから。」

平然と答える電王。

「野上、お前つて、すげえな……。」

改めて、「野上良太郎」の不幸さ(?)に、しみじみと呟くゼロノ

スであつた……。

「申し訳ありませんが、チケットを拝借。」

デイルンドが、ゼロノスの手からチケットを取ると、どこからともなく取り出したパスに差し込む。

「おい、どうやって過去に行くんだよ。」

これじゃ、人は乗れないんじゃないのか？」

ゼロノスの問いの通り、L電王が「超絶変形」した、「ライナーデ  
ンライナー」は、先頭車両の部分しかないのだ。

「大丈夫なんです。」

はつきりと断言するデイルンドは、Lデンライナーの後部に回り込  
む。

すると、そこには、電王の乗るバイク、「マシンデンバード」と同  
じような、パスの差し込み口が付いていた。

「では、しつかりつかまっけてくださいよ。」

と言うと、デイルンドは、パスを差し込んだ。

すると、本物のデンライナーと同様に、前の部分に、日付が表示さ  
れると、時計の文字盤のような丸いゲートがいくつも現れ、Lデン  
ライナーの前から後ろへと通過していく。

ついに、Lデンライナーの姿は、この時間から消えた。

その瞬間、リヨウとレナの顔に、ニヤリという笑みが浮かんだこと  
に気づいた者は、誰もいなかった……。

【2009年12月15日】

ぼんやりと立ち尽くすリヨウ。

その身体から、砂がこぼれ落ちると、Mイマジンの姿になった。

すると、その目の前に、光る赤い輪がいくつも現れたかと思うと、  
それを通してLデンライナーが出現した。

早速、ゼロガッシャー・ボウガンモードでMイマジンを撃つゼロノ  
ス。

なんともあつけなく、Mイマジンは爆発してしまった。

「ふう、片付いたな。」

そうゼロノスが呟くと、

「ごめん、帰りもアレで帰るの？」

実は、めっちゃくちゃ気持ち悪いんだけど……。」

おずおずと言い出すLデンライナー。

「どうやら、「自分酔い」(?)したらしい。

しかし、そんな、どこか安堵感のある雰囲気とは裏腹に、ディロンの心中には、何かモヤモヤとした思いがあった。

……おかしい。

いくらなんでもあつさりしすぎだ。

あれだけで終わるほど、この世界の危機は小さかったのか……？  
するとそこに、

「ご心配なく。」

オーナーの声に似ているが、少し高い声が出た。

「え、駅長……！」

そう、「キングライナー」の駅長である。

「『時の列車』でも、イマジンでもない反応が、過去に向かったの  
で、来てみたのですが……。」

『野上良太郎』君、『桜井侑斗』君、それに……、「デイ……、

いや、『刈谷凶二』です。「刈谷凶二君、あなた方は、責任を持つ  
て、元の時間にお送りします。」

「ありがとうございます！」

そう礼を言うと、3人は変身を解き、キングライナーに乗り込んだ。  
すると、凶二は、駅長に近づくと、

「突然で申し訳ないんですが、1つ、お願いしたいことがあります  
て……。」

と小声で話しかけ、耳元で何かを頼んだ。

「ええ、わかりました。」

快く了承する駅長。

凶二は礼を言い、今度は良太郎たちの所に行くと、こう問いかけた。

「野上さん、あなたは、どこでディケイドと知り合っただんですか？」

「ああ……。」

実は、『渡くん』に頼まれて……、

「渡？」

まさか、『紅渡』ですか？」

はい、そうですけど。

渡くんをご存知なんですか？」

「ええ、まあ……。」

と答えながら、

……おいおい、よりによって、『オリジナル』の電王かよ。

これは、ますます厄介なことになりそうだな。

少なくとも、ディケイドと同じ『次元戦士』の力を持った俺も、下手すりゃやられるかもしれない……。

と、危機感を募らせる凶二。

「あの……、実は、僕は、ディケイドを倒して良かったのか悩んでいるんです。

確かに、存在するだけで世界を破壊するかもしれないけど、今まで彼がやってきたことは、間違っていないと思って……。

それでも、倒さなきゃいけなかったんでしょうか？」

他に方法はなかったんでしょうか!？」

「……。」

良太郎の言葉に、ただ沈黙することしかできない一同。

「……皆さん、元の時間に着きますよ。」

駅長が、沈黙を破った。

立ち上がると、ドアの前で待つ3人。

ドアが開いて、彼らの目に飛び込んできたのは……。

「な、何なんだよ、これ……。」

ありとあらゆる怪人が、街を破壊している。

その先頭では、なんと、リヨウとレナが、それを笑いながら見ているではないか。

「どういうこと?」

良太郎が、静かに、それでいてはつきりとした声で訪ねる。

「ひーっひっひっひっ!」

計画通りに動いてくれて助かったぜ。

まあ、時の列車が使えないって言うのは予定外だったけど、おバカな『死神さん』のおかげで時間稼ぎはうまくいったし。

感謝してるぜ。」

「ふざけるな。」

先ほどまでとはガラリと変わった口調で3人をあざ笑うリヨウをキツと睨み付ける凶二。

すると、リヨウは高笑いをしながら顔にステンドグラスのような模様を浮かび上がらせ、レナは無表情のまま身体から光を放つ。

2人の姿は、それぞれ、蜘蛛に似た、「スパイダーファンガイア」、シオマネキに似た、「ウカワーム」へと変わった。

「何だあれ……。」

侑斗が呟くと、

「蜘蛛の方は、『ネガタロス』の事件の時にいたヤツに似てる。」

良太郎も言う。

「『ワーム』に『ファンガイア』。」

それぞれ、『カプト』、『キバ』の世界にしかないハズなんですが……。

とにかく、それに加えて、あれだけの種類の怪人まで一度に連れてこられるのは、『奴ら』しかないでしょう……。」

「そーゆうことだぜ!」

「私たち、偉大なる『大シヨツカー』の計画は、もはや止められない……。」

スパイダーFとウカワームがそれぞれ言うと、

「……変身っ!」

《Liner Form》

《Charge&Up》

「Kamen Ride Dirondo」

3人も、一斉に変身する。

「へっ。」

総員、かかれっ!!」

スパイダーFの号令をきっかけに、怪人軍団が押し寄せてくる。

「『バケネコ』、『カツパ』、『ドロタボウ』……。」

ちくしょう、『夏の魔化魍』ばかりだ。

『これ』で……いや、やっぱり『こつち』だ。」

呟きながら、出しかけた、「カメンライド・キョウキ」と書かれたカードを引っ込め、また別のカードをドライバーに差し込んだ。

「Attack Ride Ongekibou Ret su-Ran」

すると、ディロンド専用の、藍色をベースカラーとした、「音撃棒・烈藍」が出現する。

ディロンドは、それを握ると、気合いを込める。

すると、先端の「鬼石」の部分に藍色の焰が灯る。

「うおおお、はっ!!」

という声とともに、烈藍を一振りすると、焰が魔化魍の群れに飛んで行き、その周囲にいた他の種類の怪人も含めて焼き尽くした。

なおも怪人軍団はやって来るが、キングライナーからの援護射撃によって、数が減っていく。

ディロンドは、その場を電王とゼロノスに任せて、他の場所で暴れる怪人を探しに行くことにした。

しばらく歩いたディロンドの目に入ったのは、人々に触手を伸ばさず、オルフェノクの一団であった。

その光景を見た瞬間、彼の脳裏にある記憶が蘇った。

自らの目の前で、「青い炎」をあげながら燃え上がる少年の姿が。

「うああああああ！」

叫びを上げ、変身を解除してしまった凶二の顔には、「灰色の模様が浮かび上がって……」。

暴れていたオルフェノクが立っていた場所には、1つ残らず、青い炎がまだくすぶっている灰の山が築かれ、それらの真ん中には、伝説獣、グリフォンを思わせる、灰色の異形が、肩で息をしながら立っている。

その異形、「グリフォンオルフェノク」は、「刈谷凶二」の姿へと戻ると、ドライバーを手に、また歩き出した……。

数の多かった怪人軍団も片付き、ゼロノスは、ウカワームとの一騎討ちをしていた。

「……全く、『バカの一つ覚え』だな。」

先ほどから、硬い装甲に向かって、ボウガンを撃ち続けるゼロノスを評して呟くウカワーム。

「それはどうかな？」

なおも撃ち続けるゼロノス。  
すると、

バキッ！

なんと、装甲に穴が空いたのだ。

「バカな……。」

と呟くウカワームに、

「いくら硬い装甲だろうと、ひたすら一点を叩けば、崩せるってことだよ。」

そう、ゼロノスは、むやみに撃っていたのではなく、一点を狙い続



けたのだ。

「・・・くそつ。」

クロックアップで逃げようとするウカワーム。

しかし、

「Attack Ride Wire Net」

次の瞬間、彼女の身体は、ワイヤーで出来た網に絡めとられていた。

「虫はワームらしく、って言うか、まあ、蟹<sup>ワーム</sup>だけど、虫取り網にかかるとくんだな。

おっと、逃げようつたつてそうは行かないぜ。

そいつの強度なら、お前の装甲ぐらい、たやすく砕いちまうからな。

「

ドライバーを構えたディロンドが、いつの間にか立っていた。

「桜井さん、とどめもよろしくお願いします。」

その言葉に、カードをベルトから抜き取り、ゼロガツシャーに装填するゼロノス。

《Full Charge》

引き金を引くと、光る矢が放たれ、きつちりと装甲の穴を通して、ウカワームに命中する。

「だ、大シヨツカーに・・・、栄光・・・、あれ・・・。」

爆発するウカワーム。

その頃、L電王も、スパイダーFと戦っていた。

しかし、スパイダーFのスピードに苦戦するL電王。

「どうした、ふらふらじゃねえか!!」

先ほどの「自分酔い」から回復しきっていないのもあり、スタミナが切れかけているL電王。

しかし、そこにディロンドとゼロノスがやって来た。

ドライバーを振るいながら、話を始めるディロンド。

「野上さん、さっきの話の続きなんですが・・・。」

もう過ぎてしまった過去を嘆いても、どうすることもできません。かといって、『未来を切り開く』というのも、それほど簡単ではありません。

私たちに出来るのは、『<sup>いま</sup>現在を生きる』こと、なんじゃないでしょうか？

たとえ、『時の守護者』や『次元戦士』みたいな力を持っていたとしても。

そうして生きた『今日』が、『明日』を、『時間』を、『歴史』を作る、そういうことなんじゃないでしょうか！？」

その言葉に、ゼロノスに支えられていたL電王が、しっかりと、自分の足で立ち上がった。

「ありがとうございます。」

やっと、吹っ切れた気がします。」

「野上さん、もう一回、『アレ』でいかせて下さい。」

ディロンドの言葉に、力強く頷くL電王。

「Final Form Ride De De De Den-O」

「脱臼には、気をつけて！！」

今度はスムーズに超絶変形したLデンライナー。

「さて、キバつてとどめと行きますか！！」

二枚のカードを取り出すディロンド。

「Attack Ride Zan-bat Sword」

「Final Attack Ride De De」

De Den-O」

すると、ディロンドの手には、ファンガイアのキングに代々受け継がれた、「ザンバットソード」が握られ、Lデンライナーの前からは、光のレールが現れ、Zソードを構えたディロンドがそれに飛び乗った。

「必殺、電車斬り・ディロンド&ザンバットバージョン！！」

某赤鬼の如く、技名を叫ぶと、「ザンバットバット」で刃を研ぎ、

赤く輝く刃でスパイダーFを斬りつける。

すると、スパイダーFは、リヨウの姿に戻る。

「ふっ、これだけの少人数で、俺たちを全滅させるなんて、なかなかやるじゃねえか。」

せっかくだ、いいこと教えてやるよ。

これだけで、偉大なる大シヨツカーの計画が断たれたなんて思わねえことだ。

そもそも、デンライナーの消失にしても、『計画』を阻止しようとする、忌々しい『預言者』の差し金だからなあ……。」

そう言つて、リヨウは、大シヨツカーの計画の「真実」を語り始めた……。

「マジかよ……。」

リヨウの話聞き終えたゼロノスが、思わず呟く。

「でも、どうしてそんなことを俺たちに話した？」

デイロンドの問いに、

「ふん、計画を止めようとおがいた末に、止められなくて、悔しがるお前らを見てみたいと思っただけだ。」

言い終えると同時に、ガラス状になつて碎けるリヨウ。

すると、L電王とゼロノスは、デイロンドの方を向いて、

「あんな話を聞いた以上、僕たちも、黙って見てる訳にはいかない。」

「俺たちにも、力貸させてくれ。」

と言う。

しかし、デイロンドは、

「……すみません。」

と言いながら、1枚のカードをドライバーに差し込む。

「Attack Ride Memory Reap」

そして、振り返りざまにL電王とゼロノスの身体に刃を通過させる。変身が解除され、倒れ込む良太郎と侑斗。

「これ以上、別世界の事件に巻き込む訳には行かねえんだよ……」  
「  
仮面の下で、小声で、しかし、きっぱりと呟く凶二。」

次に良太郎と侑斗が意識を取り戻した時には、2人はミルクディッパーのカウンターにいた。

「……あれ、俺たち、一体何やってたんだろう？」

突っ伏していたカウンターから頭を上げる侑斗。

「確か、デンライナーがいなくなったって話をして……  
ええつと……。」

「野上、もういい。」

『特異点』のお前が何も覚えてないってことは、やっぱり何もなかったんじゃないか？

ただ、寝てしまっただけで。」

と言って、冷めたコーヒを一口飲む侑斗。

良太郎は、

「……そうかもね。」

と言うと、侑斗には聞こえないように、

「侑斗は、完全に忘れたみたいだから、言わない方がいいかな。」

記憶を消すなんてことまでして、僕たちを巻き込まないようにしたんだから、ちゃんと『計画』を阻止してよ、『死神さん』……。」  
と、こっそりと呟くのであった……。

その頃、

「約束通り、着きましたよ。」

ここが、デンライナーが消息を絶った場所です。」

時の砂漠の真ん中で、キングライナーが停車する。

「ありがとうございます。じゃあ、ここで降りして下さい。」

凶二が駅長に言うと、

「本当に大丈夫なんですか……、おっと、仮にも次元戦士なら、

これぐらい平気でしたか。」

駅長の問いに、笑いを浮かべながら頷く凶二。

そのまま、砂漠へと降りてゆく。

走り去るキングライナー。

「さて……。」

「Attack Ride Hole Searching」

1枚のカードをドライバーに差し込み、振るうと、飛び出した刃があちこちを飛び回る。

しばらくすると、その刃が一ヶ所の空間に突き刺さったかと思うと、そこにオーロラが出現した。

「やっぱりか。」

そのまま、凶二はオーロラをくぐり、「次の世界」、そう、「シンケンジャーの世界」へと向かった……。

はい。

という訳で、「凶二の秘密」とは、実はオルフェノクだった、という事でした。

もうお気づきの方もいらっしゃると思いますが、前作の外伝で、「イクサの世界」の大村兄弟に話した、「凶二の知り合いのオルフェノク」とは、彼自身のことだったんです。

ちなみに、その時の「友人」というのが、彼の仲間のデイケイド、「林田千布由」だったりします。

まあ、こういったパターンでは、思い出話に出てくる「知人」は、実は話し手自身というのは、よくある話ですが。

そして、良太郎だけは、「メモリーリープ」が効いていませんでしたが、私の理屈としては、次のような理由です。

メモリーリープは、本来1人の人間の記憶を、その人物から完全に切り離すためのカードで、凶二は、良太郎と侑斗の記憶を一度に消そうとしたために、両方に不完全な形で効果が現れ、良太郎の「特異点」としての性質で、消そうとした記憶が甦ってしまった。

従って、侑斗も、記憶は完全には消えておらず、いわば「思い出せない」という状態です。

良太郎は、侑斗には黙っておくつもりなのですが……。

(特異点の能力が、不完全な記憶の修復という方向に働いた、というのは、ちょっと強引かもしれませんが……)

この後には、この外伝の設定集を載せますが、その次には、いよいよ、デンライナーに乗ったメンバーが、過去に到着します。

まあ、その前に、設定集をぜひご覧ください！

## 外伝・設定（前書き）

外伝のネタバレを含みますので、先に外伝をお読みいただくことをおすすめしますよ・・・。



## 外伝・設定

### ・ライナーデンライナー

「仮面ライダー電王・ライナーフォーム」が、「FFR・電王」のカードの力によって「超絶変形」した、デンライナーの先頭車両に似た姿。

後部に、チケットを入れたパスを挿入することで、過去へ行くことが出来る。

ちなみに、超絶変形された本人が「乗り物酔い」になることがあるらしい。

「FAR・電王」のカードで、L電王の必殺技、「電車斬り」に似た技、「デイルンドラピッド」を発動させることが出来る。

(但し、今回の相手がファンガイアだったため、本編中では、『デカメンソード』の代わりに『ザンバットソード』を用いていた。)

### ・雲野リヨウ

モルイマジンと、「彼女のレナと話し合いたい」という契約を結んでしまった若い男。

実は、悪の秘密結社、「大ショッカー」の一員、「スパイダーファンガイア」であった。

最後は、デイルンドとLデンライナーの必殺技、「電車斬り・デイルンド&ザンバットバージョン」を受けて倒された。

死の間際に、大ショッカーの計画についての「真実」を語った。

### ・蟹山レナ

リヨウの彼女。

リヨウ同様、正体は、大ショッカーの一員、「ウカフォーム」であった。

口数が少なく、正体を明かす前のセリフが、「キヤーー!!」しかな

い（笑）。  
硬い装甲を、ゼロノスのボウガン連続射撃で崩され、その穴を狙ったゼロノスの必殺技、「グランドストライク・ver・Zero」で倒された。

・グリフォンオルフェノク

伝説獣・グリフォンの性質を持ったオルフェノク。

実は、刈谷凶二が、生後まもなく、原因不明の高熱で生死の境をさまよった際に覚醒した力である。

本編では、人々を襲うオルフェノクたちの姿に、ある「過去のトラウマ」が蘇った凶二が変身し、オルフェノクたちを倒した。

ディロンドと同様に、鎌を武器とする他、背中の翼から、オルフェノクの寿命を早め、自己崩壊させる力を持った羽根を飛ばすことが出来る。

・AR「ワイヤーネット」

ワイヤーで出来た網を出現させ、敵の動きを止めるカード。

・AR「メモリーリープ」

対象となる人物の記憶を文字通り「刈り取る」カード。

「時間の干渉」ではないため、理論上、「特異点」にも効果はあるはずなのだが・・・。

ちなみに、名前は似ているものの、天〇術とは無関係である。

・AR「ホールサーチング」

次元の歪み（オーロラなど）が発生していた場所を探知する、光の刃を飛ばすことが出来るカード。

## 外伝・設定（後書き）

書き出してみると、意外と短かったですね・・・。

凶二の過去に関しては、追いついて追いつき明らかにしていくつもりです。リョウの告白が一体何だったのか、ご期待ください。

一応、「AR・烈藍」とか、「KR・京鬼」（漢字表記、合ってるかな？）などは、そのまんまなので割愛させていただきました。

えっ、「KR・京鬼」を誰に使うつもりだったかって？

・・・そんなこと、言うまでもないじゃないですか。

答えは、「カーナーリー」、分かりやすいと思います（笑）。

今回はこれくらいにして、次回もお楽しみに！！

追跡！あの人はイマ！？ジン（前書き）

大変お待たせいたしました。

今回、キリの良いところまで書いたら、いつもより、少し長くなっ  
てしまいました。

さらに、今の映画に登場する、「あんなもの」を、少し形を変えて、  
出してみました。

では、ご覧ください。

追跡！あの人はイマ！？ジン

頭をさすりながらぶつぶつと文句を言う丹波。

「いたたたたたた・・・」

全く、『姫』も少しは手加減してくださればよいものを・・・

それにしても、何だ、あの『黒子』は。

いきなり『スリッパ』など持って来おって・・・」

ぼやく丹波の背後から、「光の球」が近づき、彼の身体に飛び込んだ。

「お前の望みを言え。

どんな望みも叶えてやろう・・・」

時の狭間をひた走るデンライナー！

突然、オーナーが口を開く。

「シンケンジャーの皆さん、ここまで来て、こういうことを言うのは、実に申し訳ないのですが・・・」

過去での、あなた方の下車は、許可できません。」

6人は驚いた顔になる。

その中で、

「な、なぜですか!？」

と尋ねる流之介に、

「そもそも、電王と言うのは、『特異点』という、いかなる時間の干渉からも影響を受けない能力を持った人物が、イマジンと戦ったためのものなのです。

現代のみではなく、そのイマジンが過去に飛んだ場合も含めて、です。

その『特異点』でもないあなた方が、しかも、『時の守護者』以外の力を使って戦うことは、ただでさえ不安定なこの世界の『時の運行』に悪影響を与える可能性が高いからです。」

と答えるオーナー。

「あのー、それやったら、うちらが電王になったらええんやないですか？確かに、うちらは、特異点じゃないけど、戦いの経験やったら……。」

ことは言う。

すると、

「い・け・ま・せーん!!」

突然大声になるオーナー。

「確かに、あの時は、あなた方に变身してもらいました。

しかし、それは、あなた方が元々存在していた時間だったから、ということに過ぎません。

過去での变身とは、全く話が違っんです。

特異点ではないあなた方が電王として变身を続ければ、最悪の場合、時間の干渉を受けなくなるように、あなた方が、元の時間から切り離されるということにもなりかねません。

そうなつては、この世界の時の運行がさらに乱れ、事態が悪化してしまうのです。」

「でも、それだったら、誰が電王になるんだよ？」

源太が疑問を口にする、オーナーは、口元に笑みを浮かべると立ち上がり、「ある人物」に近寄ると、その肩をポンと叩いた。

「……頼みましたよ、ルナ君。」

騒然とする一同。

「どういうことなんですか？」

茉莉の尋ねる口調も、心なしか強くなる。

「先ほどお話ししたように、電王は、時間の干渉を受けない特異点のためのものです。

しかし、裏を返せば、時間の干渉さえ受けなければ、必ずしも特異点である必要はない、と言えるのではないのでしょうか？」

オーナーの言葉を聞いたとたん、千明が立ち上がり、オーナーの胸ぐらをつかむ。

「そんな理由で、記憶を無くして心細い思いをしてて、しかも戦う経験もないこいつを戦いに巻き込むのかよ!？」

しかし、ルナがそれを止める。

「待ってください!!!」

・・・私にやらせてください。

だって、たとえ記憶を失っていても、戦いの経験がなくても、それはあたしが何もしない理由にはならない、そうでしょう?」

その時、モモタロスたちの脳裏に、ある言葉がよみがえる。

「弱くても、運が悪くても、何も知らなくても、それは僕が何もしない理由にはならない。」

そう、電王として長い間ともに戦ってきた、野上良太郎の言葉である。

「へへっ、面白えじゃねえか。

俺は気に入ったぜ。

本人もやる気みたいだしな・・・。」

モモタロスが言うと、

「しかし・・・。「分かった。「殿!？」」

なおも渋ろうとする流之介に、今まで沈黙していた丈瑠が口を開く。

「但し、条件がある。」

俺たちも同行させてくれ。

いくらなんでも、戦いの素人1人に戦わせておいて、黙ってこの中で待ってられるほど、俺たちは我慢強くはないからな。」

しばらく黙り込むオーナー。

「・・・分かりました。」

しかし、あくまで相手にするのはイマジンのみ、この時間の外道衆には手を出さないこと。

くれぐれも、お忘れなきよう。」

頷く一同。

すると、いきなりリュウタロスがルナの身体に飛び込む。

紫のジャージにキャップとヘッドホンという、ラッパースタイルに

なったRルナは、デンライナーが到着するや否や外へと飛び出してゆく。

「今日のリュウタは、かなりはりきってるなあ……。」  
Rルナの背中に呟くウラタロス。

一方、奥方様にダメージを与えたセンチピードイマジンは、次に丹波に狙いを定める。

「もうじき、毒が全身に回る。そうなれば、この女も終わりだ。

もちろん、お前の言う『希望』とやらも同時にな……。

クッククック、ハツハツハツハツ……。

まあ心配するな、お前もすぐあの世へ送ってやる。

せいぜい、向こうでたっぷりと『小娘』の世話をしてやるんだな……。

「……。」

「小娘？」

お前、なぜそんなことを知っている!?

それは、一部の人間しか知らぬはず……。「あいにくだが、そんなことを『冥土の土産』とか言って教えてやるほど俺は親切じゃない。」

とつとと逃げ。」

毒針のついた拳を振りかざすCイマジン。

しかし、空に突然穴が開き、中から電車が現れると、扉が開き、ラッパーっぽい格好の少女が飛び降りてきた。

少女はベルトを腰に巻き、四角く、薄っぺらい黒い箱状のものをバツクルにかざす。

《Gun Form》

「答えを聞くまでもなく、お前倒すから。」

そのまま、そばにいる丹波を全く気にしないかのように、（それでも、丹波には一発たりとも当てずに）ガンモードにしたデンガッシャーを乱射するG電王。



「前回、『鳥さん』すらセリフがあつたのに、僕一言もしゃべってない。

ここで出とかないと、また作者に忘れられる……。」「  
許せ、リュウタロス!!! (by 作者)  
すると、

「待て待てーい、そういうことなら、俺の許可なしに勝手に戦うんじゃないーいー!!」

俺もしゃべってないぞー!!」

どこかの「交通ルールに厳しい宇宙のお巡りさん」のようなセリフを言いながらやって来たデネブが、リュウタロスを弾き飛ばす。

《V e g a   F o r m》

「最初に言っておく、今日のところは、ルナをよろしく!!」

そして、デンガツシャーをボウガンモードに組み換えると、Cイマジンを撃ち、丹波から遠ざける。

「さあ、今のうちに逃げて!」

V電王の呼び掛けに応え、逃げる丹波。

「これで心置きなく戦えるな。

みんな、行くぞー!!」

その間に到着していた6人の侍の先頭にいた文瑠の言葉をきっかけに、全員が携帯を取り出す。

「一筆奏上!!」

「一貫献上!!」

火

水

天

木

土

光

彼らの姿は、「侍戦隊シンケンジャー」へと変わる。

そして、順番に名乗りを始める。

「シンケンレッド、志葉丈瑠。」

しかし、この後がいつもと違っていた。

「グリーン、参上！」

「お前、ゴールドに釣られてみる？」

「ブルーの強さに、お前が泣いた。」

「ピンクだけどいいよね？」

答えは聞いてない。」

「イエロー、降臨。」

満を持して。」

思わず5人の方を振り向くレッド。

「悪いな。」

身体がないと、何もできねえから。」

グリーンの中から、モモタロスが謝る。

「ええい、かかれーっ!!！」

Cイマジンの号令で大量に出現するモールイマジン。

啞然としているレッドを尻目にMイマジンの軍勢の中突っ込んで行くシンケンジャー達（イマジン憑依）。

その背中に向かって、

「久しぶりに、俺余ってるだろ……。」

と呟くレッドであった。

シンケンマルに加えて、モモタロスオードも出現させ、二刀流になるMグリーン。

Mイマジンをバツサバツサと斬って行く。

「必殺、俺の必殺技、二刀流バージョン！」2本の剣を交差させ、Mイマジンの一群に向かって振るうと、十字状の衝撃波が飛び出し、まとめて吹き飛ばす。

一方、Uゴールドは、ウラタロッドでMイマジンを一ヶ所に追い込んでゆく。

あーっ、チマチマしてて面倒くせえ！

俺が居合いでバーツとやった方が早えと思っぜ。

「源ちゃん、まあそう言わないで。」

・・・そろそろ良いかな？」

ある程度Mイマジンが集まったところで、Uゴールドは先頭の一体にUロッドを突き立てると、そこに向かってキックを放つ。

すると、その一体の爆風でMイマジンの一群がまとめて爆発する。

「どうせ仕留めるなら、スマートに行かなきゃね。」

な、なるほど・・・。

感心する源太であった。

Kブルーは、Mイマジんたちを次々と投げ飛ばしていく。

「お前は一体何なんだ!？」

Mイマジンの内の一体がKブルーに尋ねると、

「知らざあ言っつて聞かせやしよう、時の運行を護るため戦うイマジンが1人、キンタロスとは、俺のこっちゃんー!!」

流之介に憑依しているからなのか、歌舞伎風に見栄を切ってみせるKブルー。

そうして、手に持ったキンタロスアックスを振り回す。

たちまち、Mイマジンは吹き飛ばされる。

Rピンクは、ステップを踏みながらリュウボルバーを撃ちまくる。

そして、シンケンマルをへブンファンに変えると、それで一扇ぎす

る。

すると、竜巻が現れ、Mイマジンたちを巻き込む。

そして、Rピンクは、手近にいた、竜巻に巻き込まれていないMイマジンを一体捕まえ、持ち上げると、逆立ちした状態のMイマジンの手を持って回し、天高く投げ上げると、リュウボルバーで撃つ。

撃たれたMイマジン、竜巻に飛び込み、竜巻の中のMイマジン、一体残らず爆発する。

倒したことを見届けると、リュウタロスは呟く。

「うーん、この技の名前、何が良いかな・・・？」

そうだ！

『ヘブン』ファンで『竜巻』を作って、敵を巻き込む技だから、『ヘブンスト

この後続くリュウタロスの言葉は、「大人の事情」によりカットされました。

深くお詫び申し上げます。

ワイエローも、手を後ろで組みながら、Mイマジンたちを必要最小限の動きで倒していく。

そして、ランドスライサーとともに、ジーク専用のブーメランである、「ジーマラン」を出現させると、2つを同時に投げ、次々とMイマジン仕留めていく。

その間、レッドも、必死にシンケンマルでMイマジンを斬っていく。その結果、Mイマジンの数は、みるみる減っていく。

すると、残ったMイマジンたちは、光る球に姿を変えると、あろうことが、周囲にいたナナシの中に飛び込む。

すると、ナナシの姿がたちまち変わってゆく。顔の半分は、Mイマジンのものに似たマスクで覆われ、片腕には、Mイマジンと同様の

武器が装着される。

「何だあれは……。」

殿、どうしましょう!?

まさか、こうなるなんてね……。

おいおい、マジかよ……。

まあ、倒すしかあれへんかな。

うん、やるっきゃねえな。

レッド、ブルー、ピンク、グリーン、イエロー、ゴールドの順番で  
呟く。

その頃、デンライナーの食堂車では、オーナーが1人黙々とチャー  
ハンを食べていた。

オーナーは、突然顔を上げると、扉の方を向いてこう言った。

「そんなところに立っていないで、入って来たらどうですか?」

すると、扉はスーッと開き、

「ははっ、バレてました?」

凶二が現れた。

「手に持っているものからすると、あなたは『次元戦士』なのでは  
ありませんか?」

そうならば、デンライナーを使わずとも時間を移動できるのではな  
いですか?」

オーナーが尋ねると、

「いえ、別にこれを利用したい訳では。

今日は、『筋』を通しに。

実は、ちよつと過去で『やりたいこと』がありまして……。

そういうことをする時に、『時の列車』が来ているのに、一言の断  
りもなく実行する訳にはいかないかと……。

あっ、止めても無駄ですからね。

どうしても止めるとおっしゃるのなら、実力行使で……。」

ドライバーを構えながら、凶二がそこまで言ったところで、チャー

ハンの上の旗が倒れる。

手の甲を頬に当ててオーナーが驚くと、凶二の方を向いてこう言う。  
「すみません、チャーハンに夢中で、あなたの話を全く聞いていませんでした。」

・・・これでは、あなたが何をするつもりだったとしても、私には何を言うこともできませんねえ。」

そして、一瞬だけニヤリと笑ってみせる。

オーナーは、さらにこう尋ねる。

「それにしても、どうしてあなたがわざわざそんなことをしようと思いつたのですか？」

この世界に、何か思い入れでも・・・？  
すると、凶二は、

「As a man saws, so shall he reap」

実は、この事態を引き起こしたのは、私なんです。

だから、その後始末ができるのは私しかない、それだけの話です。それと・・・。」

一旦言葉を切り、表情を引き締めて再び語り始める凶二。

「今、この時間にいるイマジン、単なる『はぐれイマジン』ではなく、どうやら、『奴ら』の息がかかっているようですし・・・。」

シンケンジャー達は、Mイマジンに憑依された、「モグラナナシ」に苦戦していた。

何しろ、斬ったそばから、砂状になって再生するため、キリがないのである。「なんでだ!？」

イマジンもナナシも倒せていたはずなのに・・・。」  
レッドがぼやくと、

「もしかすると、相乗効果で、新しい体質になったのかもね。」  
ウラタロスが苦笑ぎみに言う。

くそっ、どうすりゃいいんだよ……。

仮面の下で呟く千明。

その彼の視界に、自分の腰に提げた「あるもの」が映る。その瞬間、何かを閃くと、モモタロスに尋ねる千明。

おい、モモちゃん。

イマジンって、物に憑依とかできないかな？

「お、おお、できなくはねえけど……。」

じゃあさ、『これ』に憑依してみてくれないか？

「それ」を見たモモタロスは、

「へえ、面白えじゃねえか。

やってみつか！！」

その言葉とともに、モモタロスは、腰にあった、ブランクの秘伝ディスクを投げ上げると、グリーンの身体から抜け出して、ディスクに憑依する。

すると、白かったディスクは赤へと変わり、モモタロスの顔の絵柄が浮かび上がる。

グリーンは、ディスクをつかむと、シンケンマルの鍔の部分に装着し、回す。

シンケンマルは、モモタロスの顔が付いた剣に変わった。

「って、なんじゃこりゃあー！」

これじゃ、『天井』と一緒にじゃねえか！！」

モモタロスの言う通り、見た目は、良太郎の孫である、「野上幸太郎」が変身した、「仮面ライダーNew電王」とともに戦うイメージの、天井こと、「テディ」が変化した「マチエーテディ」に似ていなくもない。

とにかく、グリーンが、その、「モモタケン」を振るうと、先ほどまでとは違い、Mナナシを倒すことができた。

「僕たちもやってみようか？」

ウラタロスの言葉をきっかけに、残りの4体のイマジンも、それぞれ

れの持っていたディスクに憑依する。

ウラタロスの憑依した青いディスクをサカナマルに付けて、ゴールドがそれを回すと、ウラタロスの顔が付いた、釣竿状のものに変わった。

「豪快に、一本釣りで行くか!!」

ゴールドは、Mナナシを次々と釣りの要領で引き寄せると、鞭のようになる「ウラタサオ」でMナナシたちを打つと、Mナナシは爆発していく。

ブルーは、キンタロスの憑依した黄色のディスクを使い、シンケンマルをキンタロスの顔が付いた斧に変える。

「くっ、重い……。」

しかし、これしきのこと諦める私ではない!!」

それなりの重量のある「キンタオノ」は、軽く振り回すだけでも一苦労だったが、重い分だけ、打撃によるダメージも大きかった。

Mナナシが、少しずつ減ってゆく。

ピンクは、シンケンマルを紫のディスクを使い、リュウタロスの顔が付いた銃、「リュウタジユウ」へと変える。

基本、刀での戦闘が多く、スーパー化した時のモウギユウバズーカぐらいしか扱ったことのないピンクではあったが、どうやらリュウタロスの意志で弾道が曲がるらしく、的確にMナナシに弾が当たる。そして、Mナナシが固まっているところに向かってRジユウを向けると、銃口に紫のエネルギー球が生まれる。

ピンクが引き金を引くと、放たれたエネルギー球はMナナシの一群をまとめて吹き飛ばす。

イエローが、シンケンマルに白い（と言っても、ブランクの時より光沢のある白色）ディスクを装着し、回すと、中央にジークの顔が



付いた翼、「ジークハネ」となり、イエローの背中に装着される。

「行くぞ、姫!!!」

ジークの言葉とともに、イエローが地面を蹴ると、その身体が浮かび上がる。

そして、Mナナシの間を飛び回りながら、一ヶ所に集めてゆく。

やがて、ある程度集まった所で、翼を羽ばたかせ、空高く登り、落下の勢いも加えたキックを放つ。

先頭の一体の爆発をきっかけに、連鎖的に爆発していくMナナシ。

イマジンのディスクを使っていた5人は、ディスクを外す。

そしてグリーンが、

「丈瑠、五輪弾で頼むぜ!!!」

と言ったのをきっかけに、ディスクをレッドに投げる。

すると、レッドは、自分のシンケンマルを、「烈火大斬刀」に変え、さらに大筒モードへと変形させる。

投げられたディスクは、5枚揃って、烈火大斬刀の背に装填される。だが、不思議なことに、装填されたディスクは、全てブランクに戻り、烈火大斬刀を持つレッドの身体が、何故かパントタイムのような奇妙な動きをしていた。

「狭いーっ!!!」

「リユウタ、あんまり押さんといってくれ。」「一番スペース取ってるのは、キンちゃんなんだけど……。」

「だあーっ!」

いつもの『てんこ盛り』の時より狭いと思ったら、手羽野郎、てめえまでいるのかよ!!!」

「感謝しろ、お供その1。」

ありがたくも、私が手伝ってやるのだからな……。」

……お前ら、いい加減にしる……。」

ついに、たまりかねた丈瑠が、押し殺した声で呟く。

すると、

「う、ごめんなさあーい!!」

モモタロスを筆頭に、5体のイマジンは、レッドの身体から飛び出すと、デイスクの中に入る。気を取り直して、烈火大斬刀を、Mナシの残りの方向に向けて、引き金を引くレッド。

「異魔人<sup>イマジン</sup>五輪弾!!」

すると、銃口から5体のイマジンのヴィジョンが飛び出すと、それぞれの専用武器で、Mナシたちに攻撃していく。ついに、Mナシは全滅した。

その頃、V電王は、Cイマジンと戦っていた。

ゼロガツシャーで狙撃して、有利に戦っていたが、Cイマジンの、拳に付いた毒針の根元が突然伸び、鞭状になったそれで、ゼロガツシャーを弾き飛ばされてしまった。

「ふん、これで終わりだな。」

余裕をうかがわせながら、丸腰になったV電王に近づいていくCイマジン。

しかし、その時、V電王の肩に付いた、デネブの手を模した銃口が火を噴く。

「最初に言わなかったが、肩の銃口は飾りじゃない!!」

不意を突かれ、完全にCイマジンがひるんだ瞬間、

オデブ、1人で戦ってもらって悪かったな。

ここから先は、俺たちのクライマックスだから、任しといてくれ!

モモタロス率いるイマジンたちが、一気にV電王の中に飛び込む。

すると、V電王は、通称、「てんこ盛り」と呼ばれる、「クライマックスフォーム」にフォームチェンジした、かと思われたが、なんと、今回は、それに加えて、背中に、ウイングフォームの電仮面を思わせる翼が付いた、「超・クライマックスフォーム」になった。

「……って、何でこうなるんだよ!？」

「若き姫君の手助けをするのも、王子の務めだからな。」

モモタロスの言葉に、あくまでもマイペースに答えるジーク。

「そんな話、なんか初めて聞いたような気もするけど、まあいいか・  
・・。」

「とにかく、イマジンを倒すのが先決やな。」

「羽根があるってことは、飛べるんだよね？」

答えは聞かないけど。」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスがそれぞれ言う。

そして、それを見ていたレッドは、

「俺も援護するか・・・。」

と言いながら、表面に、志葉家の家紋が付いた、黒い箱を取り出す。

《Super Disk》

すると、レッドは、白い陣羽織を身に纏い、「スーパーシンケンレッド」へと変わり、専用武器である、「モウギユウバズーカ」を構える。

すると、

シンケンレッド、俺が助太刀するぞー！！

モモタロスたちに弾き出されたデネブがSレッドの元に飛んで来ると、彼の身体に飛び込もうとする。

しかし、何を間違ったか、飛び込んだのは、Sレッドの身体ではなく、モウギユウバズーカの方であった。

すると、モウギユウバズーカの銃口の前には、デネブの顔を模したパーツが付き、銃口のすぐ横には、デネブの手に似た小さな銃口が現れ、ちょうど、Zゼロノスの武器、「デネビツクバスター」とモウギユウバズーカを足して2で割ったような形になる。

「これは、俺もビツクリだあー！！」

とデネブは言うが、Sレッドは、何も言わず、その「デネビツクモウギユウバズーカ」の上部に「インロウマル」を付けたシンケンマルを装着し、一枚のディスクを装填する。

《最終奥義 Disk》

そして、Sレッドが引き金を引くと、

「弾けるデネビックパワー!!!」

デネブの、「次の作品」の決めゼリフのパクリかと思わず疑いそうになる言葉とともに、Dバズーカの、デネブの顔を模したパーツがパカッと開き、赤い牛型のエネルギーの固まりと、その後ろからゼロライナーのヴィジョンが飛び出して来る。

さらに、サイドの小さい銃口からも細かいエネルギー弾が発射されると、全てがCイマジンに命中する。

「おいコラオデブ、俺のクライマックスを勝手に取るんじゃないやねえー!!!」

モモタロスが怒鳴るが、

「先輩、さっきは『俺たちの』って言ってなかったっけ？」

「ギクッ!!!」

・・・ま、まあ、細けえことは気にすんな・・・。」

ウラタロスの冷静な突っ込みに、明らかに動揺しているようだ。

一方、必殺技を食らったCイマジンは、しぶとく立ち上がる。

「・・・まだだ、まだ終わらん。」

この手は使いたくなかったが、仕方ない。

出でよ、偉大なる『大シヨッカー』の同士よ!!!」

その言葉とともに、Cイマジンの背後に、巨大なオーロラが出現し、中から、巨大なムカデが現れる。

それを見たCイマジンは、光の球となって飛び上がると、いきなり「ムカデ」の口の中に飛び込む。

すると、なんと、「ムカデ」の額の部分が盛り上がったかと思うと、Cイマジンの上半身を形づくった。

「ハハハハハハ・・・。」

この世界の全てを壊してやる!!!」

と言いながら、ムカデの下半身がのたうちまわり、その尾で、周囲のものを壊してゆく。

「何なんだ、あれは……。」

『二ノ目』、いや、違う。

人の形でないアヤカシなんて、見たことがない。

しかも、イマジンがいきなり憑依するなんて……。」  
と、レッドが呟く。

「まあ、相手が何やったとしても、倒せばええだけや。」

キンタロスがそう言うとともに、駆け出すSC電王。

しかし、

「待つてください。」

あなた方には、『魔化魍』は倒せません。」

手に、大きな鎌を持った戦士がいきなり現れ、SC電王を止める。

その戦士の姿を見た一同は、異口同音に、こう呟いた。

「青い、ディケイド……?」

「『青』じゃなくて、『藍色』って言うてほしいんですけどね……。」

その戦士、ディロンドが、苦笑気味に言う。

## 追跡！あの人はイマ！？ジン（後書き）

はい。

今回は、この辺で区切らせていただきます。

丹波が、「契約」を結んだのも、実は、「前作」で凶二が「亜樹子」のところから盗んで、もとい、拝借してきたスリッパのせい、というようにしてみました。

ちなみに、凶二のセリフに出てきた英文は、諺で、日本語では、「蒔いた種は刈らねばならぬ」に相当するようです。

なんとなく、凶二っぽい感じがしたので、いつか使ってみようと思っていたものを、今回入れてみました。

そして、今回、「モモタケン」などを出してみました。

リュウタロスとジークに関しては、オリジナルを作ってしまったいました。

ただ、イマジンディスクは、さすがに強引すぎたかもしれませんが・・・。

また、ジークの専用武器も、勝手に作ってしまいました。

ネーミングが「ミドメラン」寄りになってしまったのは、私の発想力が乏しかったからです。

すみません。

さらに、ついに、ディロンドが参戦しました。

いよいよ次回、シンケンメンバーのカメンライドが見られますよ。

まあ、最後に出たのが「あいつ」というので、ライダーの系統はお分かりいただけるでしょうが。

ところで、噂で聞いたのですが、ゴーカイの、シンケン編のゲスト

に、なんと、ルン・・・、モゴモゴッ!?

「待て作者。」

それは、二重の意味でネタバレだろ。」

止めるな凶二。

賢明な読者の皆さんは、とっくの昔に気づいてしまっっちゃね。

・・・あはは、こっちの話です。

ともかく、次回もお楽しみに!!

歌舞く流之介　くポロリにく用心く（前書き）

お待たせいたしました。

今回は、少し短いです。

とりあえず、くご覧下さい。



歌舞く流之介　　くポロリにご用心く

「って言うか、『マカモー』って何？」

SC電王の中から問いかけるリュウタロス。

「『魔化魍』と言うのは、電王と同じく、世界を護るある種のライダー、

その世界では、『鬼』と呼ばれています  
と戦う、妖怪のようなものです。

とはいえ、この世界にいる、『外道衆』とは、全くと言っていいほど異なっていますけどね。」

「鬼？」

ああ、あの時、やたらと、俺たちを『少年』とか『青年』とか呼んでたやつの変身してたアレだな。」

デイロンドの説明を聞き、以前、「ライダー大戦の世界」で共に戦った戦士のうちの1人を思い出すモモタロス。

「そういうことです。」

で、本題なのですが……。

シンケンブルー、貴方にご協力いただきたいんです。」

「ええっ!？」

な、何故私が!？」

突然の指名に驚くブルー。

「先ほども言った通り、魔化魍は、鬼の力を用いなければ倒せません。

そこで、誰かにそれを使ってもらわなければならないのですが、貴方が、それを使うのに最も適任なんです。」

「……分かりました。」

私が、世界を救う役に立てるのなら、喜んで協力します。」

しばらく黙って考えたのち、はっきりと宣言するブルー。

「それでは……。」

手に持ったドライバーに一枚のカードをセットするディロンド。

「K a m e n    R i d e    K a b u k i」

そして、ドライバーを振ると、光る、鎌の刃のようなものが飛び出す。

そして、それがブルーの身体を通過した瞬間、変身が解除され、光は、流之介の右手に集まり、黒い音叉の形に変わる。

流之介は、音叉で左手の甲を軽く叩く。

すると、清らかな音が響き渡る。

そして、音叉を顔の前に持つてくると、流之介の額に鬼の顔が浮かび上がる。

さらに、音叉を振ると、彼の身体が、桜吹雪に包まれる。

そして、腕を振ると、そこには、緑と赤という、派手な色をした戦士が立っていた。

その姿は、名前の通り、歌舞伎の華やかさをイメージさせるものでありながら、「鬼」という呼び方もまた納得出来るようなものであった。

「これが鬼……。」

と呟く流之介の脳裏に、自らの言葉が蘇った。

「この世界を守るためには、私は、『鬼』にだってなってみせます  
！」

「あーっ！

本当に鬼になってしまったあー！！」

思わず叫ぶ流之介。

それを聞いて、

「すごいわ流さん、有言実行やなあ……。」

もしかして、こうなることも予想してはったんやろか!？」

「いや、ないと思うよ……。」

天然発言をして、ピンクに突っ込まれるイエロー。

その間に、目の前の、「センチピードイマジン・『オオムカデ』憑依体」に向かっていく、「仮面ライダー歌舞鬼」。

腰から、「音撃棒・烈翠」を取り外し、魔化魍、「オオムカデ」の部分を押く。

確実にダメージを与えたところで、歌舞鬼は、少し距離を取ると、烈翠を構える。

「はああああ。。。」

歌舞鬼が烈翠に気合いを込めると、目の前に、三つ巴のような形をした、緑色の焰の円が現れる。

「『音撃打・業火絢爛』!!!」

の言葉と共に、歌舞鬼が、バチで太鼓を叩くかのように焰の円を打つと、それは飛んで行き、オオムカデに命中する。

オオムカデは爆発するが、その寸前に、Cイマジンはその身体から脱出していた。

「逃がさねえぜっ!!!」

《Full Charge》

その瞬間、モモタロスの言葉とともに、SC電王が羽ばたきながら飛び上がり、Cイマジンに、「超・ボイスターズキック」を放つた。「・・・俺が死んでも、偉大なる大ショッカーは、まだまだ諦めない。」

覚悟しておけ。。。」

キックを食らい、ついに爆発するCイマジン。

「へっ、そんなときはそんなときで、また倒すだけだよ。」

モモタロスが、爆炎に向かって言い放つ。

こうして、ようやく、長かった戦いは、終わりを告げたのだった。

それを見届け、変身を解く歌舞鬼。

仲間たちの方へと振り返ると、さわやかにサムズアップしてみせる流之介。

・・・全裸で。

「・・・キャアアー!!!」

と、女性陣の悲鳴が響き渡る。

その時には、既にデIRONドの姿はなく、彼の立っていたところには、いつの間にか、下着と青いジャージが用意されていた。

しばらくして、

「全く、こんなタイミングで思い出すなんて、最悪だな・・・。」  
凜とした少女の声が響く。

一同が振り向くと、その声の主はルナだった。  
いや、もはやその名は必要無くなったのだ。

何故なら、彼女は、「本当の自分」を取り戻したのだから・・・。  
侍たちは跪き（もちろん、流之介は着替えを着て）、先頭にいた文瑠が代表して言う。

「お帰りなさいませ、『母上』・・・。」

「文瑠、それにみんな、私のせいで、迷惑をかけて本当に済まなかった。」

そう、彼女こそ、真の志葉家十八代目当主であり、文瑠の義理の母でもある、「志葉薫」であったのだ。

「お取り込み中申し訳ありませんが、そろそろ元の時間に戻りましょう。」

いつの間にか降りてきていたオーナーに促され、一同はデンライナーに戻る。

デンライナーが地面を離れると、眼下に広がる、イメージンや魔化魍

によって破壊された部分がみるみる復元されていく。

「これが、人の『記憶』の力です。」

このように、人の記憶とは、脆くもあり、また、強くもあるのです。

その言葉とほぼ同時に、デンライナーは、空に開いた穴の中に飛び込む。

そして、デンライナーが通過した後、穴はゆっくりと閉じる。

現代にたどり着いた一同は、源太のたつての希望で、イマジンたちも含めたデンライナー一行にも食べてもらえるよう、食堂車で寿司パーティーを開いていた。

「どうだ、俺の寿司は!?!」

デンライナー一行に尋ねる源太。

しかし、

「うーん……。」

「確かに、不味くはないけどね……。」

「『可もなく不可もなく』、ちゅうちゅところちゅちゅか?」

「うん、フツー!」

「私が食するには、いささか平凡過ぎるな。」

「これなら、俺にも作れるかな?」

「これだったら、私の知り合いの『しょういち君』が作った方が美味しいかも……。」

「ちよつとみんな、『ホントのことだけど』、そんなにはつきり言っちゃダメじゃない!」

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、ジーク、デネブ、さらにナオミまでもがそれぞれ言い、コハナがたしなめるが、フォローになっっていないどころか、かえって源太にとどめを刺してしまった。

「もう、ゴールドもブレイクもねえんだよ……。」

食堂車の隅で、なんとなく、某「アニキ」と、彼と顔がそっくりな

別の人物の両方を彷彿とさせるセリフを吐いていじける源太。  
(ちなみに、後者とは実際に一度会っている。)

だが、

「やっぱりこれが源さんのお寿司やわ。」

「そうそう。」

これで美味すぎたら、逆に違和感あると思っぜ。」

「確かに、落ち着くっていうのはあるかも。」

「これでこそ、源太の寿司だな。」

「やっと、一息ついたって感じがするな。」

「ことはちゃん、千明、茉莉ちゃん、流之介、丈ちゃん！

ありがとう!!！」

男泣きしながら、侍たちの元に飛び込んでいく。

「つまり、とびきり美味しい料理よりも、庶民的な味の方が、時に心を落ち着かせることがある、ということでしょうか……。」

オーナーが、しっかりとまとめる。

しかし、その時、オーナーがスプーンを使って食べていた寿司(握り寿司にも関わらず)の上に立てた旗が倒れる。

思わず手の甲で頬を押さえるオーナーに、

「さすがに、その食べ方はどうかと思うぞ……。」

薫が冷静に突っ込む。

食堂車は、爆笑に包まれた。

「でも、あのイメージ、『大ショッカー』って言ったよな。

奴らは、一体何がしたかったんだ……?」

モモタロスがふと口にすると、オーナーは、

「これは、『ある人物』から聞いたのですが……。」

ゆっくりと話し始める。

実は、Cイメージは、単なる「はぐれイメージ」ではなく、大ショ

ツカーによって送り込まれていたということ。

大シヨツカーは、わざと「シンケンジャーの世界」で騒動を起こし、次元戦士を一ヶ所に集め、彼らを不安定になった境界の隙間からイマジンを送り込むために利用したこと。

「・・・なるほどね。」

「やっぱり、デイケイドは世界を破壊するんやな。」

ウラタロス、キンタロスが言うが、

「それは違う。」

丈瑠は静かに言う。

「そうです。」

私たちは、デイケイドたちと二回会いましたが、どちらの時も、この世界のために戦ってくれました。」

流之介も言うつと、

「でも、いるだけで世界は破壊されるんでしょ？」

だったら、最初から来なかった方が良かったんじゃないの？」

リュウタロスが問いかける。

「世界を破壊すると言うのは確かに間違いじゃないかもしれない。

それでも、デイケイドが世界を救ったのも事実よ。」

「世界を破壊するとしても、デイケイドやクウガは、間違いなく俺たちの仲間なんだよ！」

「それに、現に、世界はこうやって残ってるじゃないですか！！」

茉莉、千明、ことも言う。

「それは結果論ではないか。

はつきり言えば、運が良かったただけだろう。」

「・・・ごちゃごちゃうるせえんだよ！！」

結局世界は救われた、それじゃいけないのかよ！？」

ジークの言葉に、それまで黙っていた源太が、テーブルを叩いて立ち上がる。

静寂に包まれる車内。

「でも、これだけははっきり言える。

デイケイドは、『門矢士<sup>かどやつかさ</sup>』は、文瑠たち6人だけでなく、私をも救ってくれた。

当主にふさわしい振る舞いをする事に縛られ、知らず知らずのうちに文瑠の当主らしい振る舞いを重荷と感じていた私は、士の姿を見て、『自分らしく』生きれば良いと気づいた。

士がわざわざそれを伝えようとしたかどうかは分からない。でも、私はそれに気づくことが出来た。

それだけでも、士に出会えた意味はあった、私はそう思っている。「静かに、はっきりと言葉を紡ぎだす薫。」

再び、沈黙が流れるが、オーナーがそれを破る。

「・・・私たちは、『世界の破壊者・デイケイド』というだけで、必要以上に彼やその仲間を敵視し過ぎてきたのかもしれないねえ・・・。」

「ああ、確かに、『デイケイドは世界を破壊しなかったから、倒さなければならぬ』って渡に言われて、俺たちは、何も考えず鵜呑みにしちまつたんだよな。今は、なんとなく、奴らも『世界』を守りたかったっていう思いは俺たちと同じだったってことが分かるよ。うな気がするぜ・・・。」

モモタロスも静かに言った。

その時、

「殿ーっ！」

「姫ーっ！！！」

彦馬と、身なりを整えた丹波が食堂車に入ってきた。

「姫のことを忘れてしまい、その上この世界を滅ぼそうとする者どもに利用されるとは、この丹波、一生の不覚でございます！！！」

「丹波、それは仕方のないことだったんだ。」



あまり気にするな。」

薫は、優しく丹波に言葉をかける。  
涙ぐむ丹波を見て、

「泣くんじゃない。」

こういう湿っぽいのは苦手なんだ……。」

薫の目にも、うつすら涙が浮かぶ。

そして、唐突に薫が言う。

「丹波、いつもありがとう。」

考えてみれば、私も安易に叩き過ぎだったな。」

「いいえ、良いのですよ……。」

改めて、絆を深めあう薫と丹波。

それを見ながら、

「皆、そろそろ失礼しよう。」

皆さん、大変お世話になりました。」

彦馬が促す。

すると、

「こちらこそ、感謝しています。」

侍の皆さんのご協力がなければ、今回の事件を解決することはできなかったでしょう。」

オーナーが、礼を述べ返す。

「侍達よ、私は、お前達とともに戦えたことを誇りに思うぞ。」

「俺も、絶対に忘れないぞ！」

「僕たちが元の世界に戻っても、仲間であいてくれるよね!？」

答えは聞いてない!!」

「お前らの絆、見とって結構泣けたで！」

「ほら、先輩もなんか言ったら？」

「……って、泣いてる!？」

「うつせえな！」

「……、これは、これは……、そうだ、目から透明な鼻血が出

ただけだバカヤロー!!」

デンライナーを降りた、侍一行に対して、食堂車の中から彼らに、ジーク、デネブ、リュウタロス、キンタロス、ウラタロスがそれぞれ言い、最後にモモタロスが、下手な言い訳で泣いていることをごまかす。

「今度会うことがあったら、その時までにはうまいって言わせるような寿司握れるようになってやるから、覚悟しとけよ!」

「源さんのお寿司は、そのままでええと思うけどな……。」

「それはさておき、とにかく、お互いの世界で頑張ろうぜ!!」

「ほんとは、私たちが暇になる時が来るのが良いのかもしれないけど……。」

「まあ、今はやるべきことをひたすらやることだな!!」

「ああ。」

ドウコクたちは倒したとはいえ、まだ時々ナナシは出てくる。

完全なる安息の日はまだ遠いな。」

「そうだな。」

『骨のシタリ』も、まだ姿を隠したままだし、油断はできない。」

源太、ことは、千明、茉莉、流之介、文瑠、薫が言う。

「まあまあ、今のところはそれは置いておいて、皆さんに別れを告げるとしましょう。」

彦馬に促され、侍達は、飛び立とうとするデンライナーに手を振る。空へと舞い上がるデンライナーは、やがて空間に穴を開け、その中へと飛び込んでいく。

そして穴は閉じ、デンライナーの姿は見えなくなった……。

歌舞く流之介　　くポロリにご用心く（後書き）

はい。

今回は、後半がシリアスだったので、その分前半をネタ多めにしてみました。

まず、流之介の歌舞鬼への変身。

本編でも言った通り、流之介の「鬼にでもく」発言は、一応伏線でした。

ちなみに、凶二はあれを聞いておらず、歌舞鬼として選んだのは、単なる偶然です。

あと、全裸ですが、以前、アヤカシに、小便小僧と魂を入れ替えられた時に「前科」があるので、

「一回も二回も一緒だろ。」  
と思い（待て）、ああしてみました。

ちなみに、侑斗を強鬼にしなかったのも、このネタをとっておくためでした。

べ、別に、  
「さすがに、侑斗『は』脱がしたらまずいかな？」

なんて考えた訳ではありませんよ。  
本当です。

信じてください。

（目が泳いでいる。）

続いて、ナオミさんのセリフに出て来た、知り合いの「しょういち君」は、かつて彼女の（正確には、彼女の親戚の）家に一緒に居候していた青年で、今は、レストランを経営している、らしいです。  
もしかすると、記憶喪失だったこともある、かもしれませぬ。

・・・何故でしょうか、どこかで聞き覚えのあるような設定ですね。

一体、どこで聞いたのやら・・・？  
(とぼけるな。)

個人的には、あの「パリの料理人」との絡みを見てみたいですね。おそらく、終始マイペースな「しようち君」に、俺様キャラを發揮できず、「パリの料理人」の調子が狂う、みたいな流れになると予想しています。

今回、それほど長くないのに、時間がかかってしまいました。

実は、並行して「次回作」の執筆にも取りかかっておりまして、執筆ペースが分割されたためです。

次回作については、一応、最終回と同時に改めてお知らせをしたいと思います。

さて、今回、デンライナーメンバーが「シンケンジャーの世界」を去りました。

しかし・・・、

(どこからか人形を取り出して、肩に乗せ、同時にラジカセから『モーツアルトのレクイエム』を流しながら、)

物語は、エンドマークを迎えることで初めて完結します。そう、物事の一番重要な要素は、終ま・・・、

(そのとき、突然吹いた風で、人形が肩から落ちる)

あああああああ！！

・・・失礼、取り乱しました。

今回は、いよいよ最終回です。

「あの」キャラクターも登場します。

それでは、この物語に、良き終わりの訪れんことを・・・。

## エピソード（前書き）

今回、ついに最終話です。

短めですがご覧くださいませ。

## エピソード

2009年上旬。

「三途の川」を溢れさせることを目的とした活動も、再び結成されたシンケンジャーの前に、はかばかしい成果が上がらないまま数ヶ月が経ち、「外道衆」の間にも焦りが生まれつつあった。

そんな中、荒涼たる河原に佇み、赤く淀んだ空を眺める一体の異形の姿があった。

すると、白い毛並みが印象的な、狼を思わせるその異形、アヤカシの「ユキガブリ」は、突然後ろから声をかけられる。

「ユキガブリ、だな？」

ユキガブリが振り返ると、巨大な鎌を持った若い男が立っていた。

「な、何だおぬしは!？」

ここはただの人間が来られるようなところではないはずだ!！」  
すると、その男は、

「あいにく、俺は『ただの』人間じゃない。

いや、そもそも、『人間ですらない』が正しいか……。」

と言うと、その姿を、一瞬だけ灰色に変える。

「なっ!？」

おぬしも『はぐれ外道』なのか!？」

「いや、俺は外道衆じゃないぞ。

その話はさておき、単刀直入に言わせてもらおう。

悪いが、お前には、この世界から消えてもらう。」

その男、刈谷凶二の言葉に激昂するユキガブリ。

「何だと!！」

なぜ某が消えねばならぬのだ!？」

種族こそ違え、広く言えば、仲間のようなものではないか……。」

「お前と、一緒にするんじゃないねえ……!！」

「Kamen Ride Dirondod」

鎌にカードを差し込んだ瞬間、彼の身体を灰色のヴィジョンが包み、藍色の戦士にその姿を変えさせる。

「まあ、それほど丁寧に説明するつもりはないが、かいつまんで言えば、この世界に生じつつある『歪み』をなんとかするには、歪みに、直接『詰め物』をぶちこむのが一番手っ取り早い、ってことだ。」

「ならば、なぜ某が、その詰め物にならねばならぬ!?

某には、そのようなことになる心当たりはないわ!!

「・・・ところがどっこい、理由はあるんだよ。」

但し、それは『これから先』に起こることだな。」

そう言つて、また別のカードを取り出すデイルンド。

「Attack Ride Bio」

そして、その鎌、「デイルンドライバー」を振るうと、刃の先端から、「仮面ライダーカリス」と同様の、2本の鳶が飛び出し、それぞれ、腕を含めた身体と、足を縛り上げる。

「くっ!

おい、いきなり手足を縛るとは、それでもおぬしは『正義の戦士』か!?

「正義?」

・・・あいにく、俺は、自分が正義のために戦ってるだなんて思ったことは一度もない。」

「ならば、おぬしは何のために戦う!?

「何のために、か・・・。」

しいて言うなら、その世界の『物語』をよりよい形にするため、つてところかな?

そのためなら、たとえ悪と呼ばれようとも、俺は後悔しない。」

そう言いながら、デイルンドは、何も無い空間に向かって、刃を降り下ろす。

すると、空間に裂け目が生じる。

しかし、その先に広がる世界は、いつものような、人の暮らす世界ではなく、真っ黒な闇が広がり、すべてを飲み込もうとするように、穴の中へと、風が強い勢いで吹き込んでいた。ディロンドは、無言で、身体を縛り上げられたユキガブリの後ろに近付くと、

ドンッ！！

穴の方に向かって、その背中を突き飛ばす。

「うわああああー！！」

ユキガブリの身体を飲み込んだ「歪み」は、まるで満腹になったかのようにゆっくりと閉じる。

完全に閉じきつたのを見届けたディロンドは、

「まったく、他人には、『現在いまを生きることが一番大事』とか言っ  
といて、言った本人が過去を変えてりや、世話ねえよな……。」  
と呟き、変身を解く。

そして、

「くそっ、やっぱり三途の川の空気は目にしみるぜ……。」

凶二はさりげなく目をぬぐうと、一枚のカードをドライバーに差す。

「Attack Ride Time Slide」

そして、ドライバーを振るうと、オーロラが現れ、表面に時計のヴ  
イジョンが浮かぶ。

その針が高速で右に回るとそのヴィジョンは消え、凶二はオーロラ  
をくぐる。

彼がくぐり終わると、ドライバーからカードが飛び出し、カード自  
体が砂状になって崩れる。

凶二は、目の前にいる、茶色い帽子とコートの後ろ姿に声をかける。

「『鳴滝さん』……。」



その頃、デンライナーは、元の「電王の世界」に戻ってきていた。モモタロスは、そっと呼び掛けてみる。

「良太郎……？」  
すると、

おかえり、モモタロス……。

あの時、急につながりが途切れたにも関わらず、良太郎の声は穏やかであった。

「良太郎、意外と落ち着いてるね……。」  
ウラタロスが呟くと、

ちよつと待つてて。

侑斗と一緒にそっちに行くから。

と答えた良太郎。しばらくして、食堂車の扉が開き、良太郎と侑斗が入ってくる。

「侑斗ー！」

心配かけて本当にごめん！！

これ、お詫びのしるしに、デネブキャンディーだ。」

デネブが侑斗に飴を差し出すと、それが何かを知っている、デンライナーメンバーたちは、密かに笑いをこらえる。

侑斗がそれを口に含んでしばらくすると、

「デーネーブー、何でこんなところに椎茸入れてんだよ！」

こういうやり方だけはやめろって言っただろー！！！」

たちまち、デネブは、侑斗に関節技をかけられてしまう。

「まったく、オデブは油断も隙もないで。」

キンタロスの言葉にどつと沸く車内。

「ねー良太郎、何でそんなに落ち着いてるの？」

まさか、僕たちのこと心配してなかったとか……？」

リュウタロスの問いかけに、

「違うよ。」

確かに心配はした。

でも、みんなだったら大丈夫だって信じてただけ。

じゃあ聞かせてもらっていいかな、今まで一体何をしていたのかを？」  
「ふふふ、さすがは良太郎、芯は強いのだな。」

よからう、では、何があったか話すとしよう……。」  
ジークの言葉に、デンライナーメンバーたちは、今回の出来事を語り始めるのであった……。

「『鳴滝さん』……。」

なんとか、『シンケンジャーの世界』の一件は収めてきましたが……。  
すいませんでした……！

最終的には、最初の『頼み』とは全然違うことをしてしまいました。

「  
そう、以前、鳴滝が凶二に頼んだのは、『シンケンジャーの世界』  
を救うことだけではなかったのだ。」

鳴滝は、振り返ると、こう言った。

「あまり気に病まないでくれ、デイロンド。」

今考えてみれば、『2人のシンケンレッドのうち、どちらかを消す』  
などというのは、無茶苦茶すぎたよ。」

鳴滝のもう1つの頼み、それは、同一の世界に、同じ能力を持つ複数  
の戦士が存在する、という、イレギュラーかつ、世界の存在に大  
きな負荷をかける状況を解消することであったのである。

「私も、最初は、それが最善の方法だと思っていましたし、志葉薫  
を、生後まもなく他の世界に送って、何も知らないまま、ごく普通の  
少女として一生を過ごさせるのが、彼女にとっても幸せなことか  
もしれないとも考えていました。」

しかし、『デイケイドが、『門矢士』が、2人のレッドを、いや、そ  
れだけでなく、『7人の侍』全員と、分け隔てなく心を通じ合わせ  
たのを見て、私の心に、疑問が浮かんだんです。」

自分に、彼らが、彼ら同士や、デイケイドたちと作り上げた『絆』  
を断ち切ることができるだろうか？

たとえできたとしても、そんなことをしていいはずがあるだろうか！？

・・・そんなことを考えたために、私は、歴史を変えることまでしてしまっただんです。

愚かしいでしょう？

あなたのことですから、

少なくとも、『おのれデイケイド！』とは言うだろうな、とは思いますが・・・。」

すると、鳴滝は、

「君も知っているだろう？

わざわざデンライナーをあの世界に飛ばしたのは、私だということ。私も、最初は、彼女が消えかけていると聞いて、君に消してもらおう必要はなくなっただと思っただよ。

でも、心がなんだかムズムズしてね。気がついた時にはデンライナーを飛ばして、彼女を中に運び込んでいた。

どうやら、私も、知らず知らずのうちに、デイケイドに感化されていたらしい。

おのれ、デイケイド・・・。」

そう穏やかな口調で言うと、鳴滝は苦笑する。

そうして、2人はひとしきり笑い合つと、どちらからともなく、分かれていくのであつた・・・。

こうして、「シンケンジャーの世界」に訪れた危機は、「異世界の戦士」たちの協力により、なんとか解決した。

そして、「シンケンジャーの世界」は、これから、いかなる物語を生み出してゆくのか？

それは……、

「……妙だねえ。」

志葉家の当主なら、火のモチカラが身体中に染み込んでいるはずなんだが……。」

「私は、志葉家十八代目当主、志葉、薫……。」

「痛い、要らんかね？」

「これこそ、骨の髄まで粟立つような戦いだあー!!」

「太夫、終わるか？」

「封印の文字が効かない!？」

「この丹波の、一番得意なモチカラを込めました。」

「天下御免の侍戦隊、シンケンジャー、いざ、参る……!!」

F i n .

## エピソード（後書き）

これにて、「シンケン×電王」、完結でございます。

今回は、アヤカシ、ユキガブリに再登場してもらいましたが、実はこうなることは、前作、「ディケイド・新たなる旅」での登場時点で決めていたんです。

つまり、私は最初から2部構成のつもりで書いていた、ということです。

凶二の行動を見て、後味の悪さを感じた皆さん、本当にすみません。私は、物事をシビアに見ているところがありまして、「全員が幸せになる、絶対的ハッピーエンドなどありえない」というのが持論の1つだったりします。

今回、凶二は、ユキガブリというキャラクターの人生をバッドエンドにしても、薫を含めた、7人の侍が、自分たちの手で物語を切り開けるようにすることを選びました。

ただ、怪人とはいえ、まだ何もしていないユキガブリを消した訳ですから、歴史の「揺り戻し」が来るといいうリスクは十分ありました。結果的には、うまくいくことになるのですが……。

そう、もうお気づきの方もいらっしゃると思いますが、実は、私は、この後、TVシリーズにつながるというつもりで書きました。

個人的には、ちょっと「God Speed Love」っぽいかな、などと思っております。

あと、凶二の行動についての詳しいことは、設定の方で説明したい

と思います。

さすがに、今から消そうとしているユキガブリを前に、凶二が丁寧に説明するのは、いかにもわざとらしい感じになりそうだったので……。

さて、本編は終わりましたが、まだ、設定集を書きますので、もうしばらくお待ちください。

あと、今回、同時に次回作の軽い予告も投稿しています。ご覧いただければ幸いです。

## 特報

ここは、風の吹く街。

「黒き切札」の元に、「緑の疾風」が帰ってくるとき、物語は再び動き出す……。

新シリーズ

「仮面ライダーW・新たなる事件簿」

ついに始動!!

「ミュージアム」、そして「財団X」の野望を打ち砕いてから1年、探偵、「左翔太郎」たちの元に、相棒、「フィリップ」が戻ってきた。

再会の喜びもつかの間、またしても事件が起こる。

そして、事件の鍵を握る美女たちも、次々と彼らの前に現れる。

さらに、それぞれの事件は1つにつながっていく……。

果たして、彼らは、事件を解決し、風都を守ることができるのか!?

第1章「A」

第2章「B」

第3章「K」

近日公開!!

## 特報（後書き）

はい。

という訳で、次回作はWです。

すでにサブタイは考えてあるのですが、なかなかネタバレっばい感じなので、今の時点では、まだアルファベットのみの公開とさせていただきます。

一応、設定集を投稿する時に、同時に、一章の予告を載せる予定です。

それで、この作品には、ゲストとして、クイーン&エリザベスの「仲間」の皆さんをモチーフとするキャラクターを出します。

私自身、さほど彼女たちについて詳しくはないので、出せるのは、一部の方だけになります。

しかも、どちらかと言えば「リイマジ」的な感じであり、厳密な形での再現という訳ではありません。

さらに、数名がドーパントになります。

よって、そういう方々が苦手という方、あるいは好きだから、そういう形で出るのはあまり見たくないという方にとっては、あまりおすすめできないかもしれません。

そういった点は、あらかじめご理解いただければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。



## 設定（前書き）

これを読む前に、今作だけでなく、前作もお読みになっておくことをおすすめいたします。

## 設定

### ・ルナ

「シンケンジャーの世界」で、歴史改変の影響を受け、この世界の「時の運行」からこぼれ落ちかけた少女。その時のショックで、記憶を失っていた。

時の運行からこぼれ落ちかけているという状況から、デンライナーのオーナーの考えにより、擬似的な「特異点」として、電王になることになった。

実は、その正体は志葉家の十八代目当主、「志葉薫」である。

ちなみに、歴史改変の間は、「謎のアヤカシ」の手で、彼女を身ごもる母親もろとも、命を奪われたことになっていた。（詳しくは後述）

余談ではあるが、ルナという名前の本当の由来は、もちろん「中の人」にちなんだものである。

それにしても、月を見て、敢えてイタリア語を選ぶあたりが、ウラタロスらしいところではある。

### ・センチピードイマジジン

2010年の現在にやって来た未来人のエネルギー体が、丹波歳三の思い描く、『依藤太の百足退治』から、大百足をイメージして現出した存在。

時代錯誤気味なところのある丹波のイメージを利用したため、比較的和風な外見をしている。

丹波の、「志葉薫に、自分を叩くのを止めさせたい」という望みから、拳に付いた毒針で薫の手をしばれさせることで契約を完了させ、過去（血祭ドウコクが志葉家を襲撃した日）に飛んだ。

そして、薫を身ごもっている、十七代目当主の妻（本編中では『奥方様』とのみ呼ばれる）の心臓に、直接毒を打ち込むことで、親子を一度に死に至らしめた。

なお、この様子を目撃した者が、和風の外見も相まって、アヤカシであると勘違いしたため、一部の関係者には「謎のアヤカシ」として認知されていた。

実は、大シヨツカーの手で送り込まれたイマジンであり、薫親子の命を奪うという行動も、歴史改変により戦力が減少したところで、この世界を支配することを狙った意図的なものであった。

最後は、同じく大シヨツカー所属の魔化魍、「オオムカデ」を呼び出して憑依し、一気に世界を破壊しようとしたが、流之介の変身した、「仮面ライダー歌舞鬼」によりオオムカデは倒され、直前に離脱したCイマジンも、SC電王の「超・ボイスターズキック」で倒された。

ちなみに、オリジナルのデンライナーメンバーがSC電王に変身したのは、今回が初めてである。

（私のオリジナルとリイマジの定義は、プロローグのあとがきを参照のこと。）

### ・丹波歳三

言わずと知れた、志葉薫に仕える、ちょっと嫌味な家臣。

彦馬よりも重臣らしい。

この作品では、Cイマジンと契約を交わし、目の前で奥方様と、その身体に宿る薫の命が奪われたことに責任を感じ、姿をくramsしたことになる。

むさ苦しい姿で契約者として初登場し、さらに、過去から戻ってきた侍と、デンライナーメンバーの前に、身なりを整えた状態で再登場し、そこで、薫との絆を深めあった。

・モグラナナシ

モグラ型で、イマジンにおける戦闘員的存在である「モールイマジン」が、外道衆の、同じく戦闘員的存在、「ナナシ」に憑依したことで誕生した。

見た目は、ナナシが、Mイマジンの鉄仮面の半分と、鉤爪や斧といった武器を付けた感じである。

体質変化からか、斬られると、砂状になって復活し、シンケンジャーたちを苦戦させる。

しかし、イマジンディスク（後述）により、侍と電王の力を同時にぶつけることで、倒すことができた。

・イマジンディスク

千明の発案により、ブランクの「秘伝ディスク」に、モモタロスたち、イマジンが憑依することでできたディスク。

シンケンマルに装着し、回すことで、イマジンたちの顔が付いた武器に変えることができる。

これは、リイマジにおいて、野上幸太郎が、デンライナーのイマジンたちの力を借りて戦った時に、イマジンたちが変化した武器と同じ姿である。

（リユウタロス、ジークに関しては、現時点でまだ未登場のため、オリジナルである。）

必殺技は、レッドの持つ、「烈火大斬刀・大筒モード」に五枚のディスクを装填することで発動する、「異魔人五輪弾」。

・デネビツクモウギユウバズーカ

デネブが、Sレッドに憑依しようとして、誤ってモウギユウバズー

カに憑依したことで、偶然誕生した。モウギユウバズーカとデネビツクバスターを足して2で割った感じの見た目である。必殺技は、「最終奥義ディスク」をセットすることで発動する、「デネビツク外道覆滅」。

・凶二の行動について

そもそも、この「シンケンジャーの世界」に訪れた危機のきっかけは、前作における「大シヨツカー」の介入であった。

では、ここで思い出してもらいたい。

なぜ、わざわざ仮面ライダーのいない世界に手を出したのか？

そう、大シヨツカーの開発した、「ガミオメモリ」を扱うことが出来る者を探していたところ、それが、「過剰適合者」であるユキガブリしかいなかったからである。

つまり、凶二は、ユキガブリの存在を消すことで、大シヨツカーが付け入る隙を潰すことと同時に、レッド2人が共存出来るようにすることを狙ったのだ。

では、なぜ、ユキガブリの存在を消すことが、レッドの共存につながるのか？

この「シンケンジャーの世界」は、2人のレッドが存在していたために、負荷がかかっていた。

その結果として、この世界で生きて行けるキャラクターの数が、飽和に近づいていたのだ。

そういった状態になった世界は、世界自体の存続のため、キャラクターを淘汰して、存在を保とうとする。

そして、そのままに行けば、消えてしまうのは、イレギュラーな存在であるレッドのどちらか、さらに言えば、長い間表だって活動をして来なかった薫になる可能性が高かったのだ。

そこで、先手を打ってユキガブリという存在を消してしまうことで、世界がレッドを淘汰することを防止したのである。

・歴史改変が与えた影響

ユキガブリが消えたことで、大ショッカーは、わざわざシンケンジャーの世界に手を出す理由が無くなったため、結果として、この世界に「滅びの現象」が起こることも無くなり、デイケイド一行の2回目の訪問も無くなった。

従って、次元戦士を一ヶ所に集め、不安定になった世界の境界から、Cイマジンが送り込まれることも無くなったのである。

つまり、異世界からの来訪者と出会うことが無くなったシンケンメンバーは両方の物語を忘れ、写真館メンバーと、デンライナーメンバーは、自分たちが関わった方の物語だけの記憶を持つことになった。

結局のところ、2つの物語を完全に覚えているのは、両方に積極的に関わった、鳴滝と凶二の2人だけ、ということである……。

「待てよ作者。」

全部をちゃんと覚えてくれてる人は、他にもいるだろ?」

「ごめん凶二、……それって、誰だっけ?

まったく心当たりないんだけど……。

「本当に分からねえのか……?」

それは、今まで読んで下さった読者の皆さんだろうか!」

そ、そうだった!!

皆様、今までお付き合いいただき、本当にありがとうございます。

シンケンジャーの世界からは、この物語は失われてしまいました。が、皆様の心の中にいつまでもこの物語が残ってくれることを願っています。

また、次回作もぜひご鼻屑にしてくださいませ。

では、次回予告も投稿しておきますので、ご覧いただければ幸いです。

## 次回予告

次回、「仮面ライダーW・新たなる事件簿」は！

風都で頻発している、「天使」に似たドーパントによる事件、その被害者の共通点は、

「『モンスターペイシエント』？」

フィリップとの再会の喜びに浸る間もなく、調査を始める翔太郎たち。

「翔ちゃん、何してんの？」

「クイーン、エリザベス！！」

何でここにいるのよ？」

「『田上敦子』です。」

よろしくお願いします。」

「私、『鷹羽みなみ』と言います。」

事件を調べる中で浮かび上がる、過去の「ある事故」との関わり。そして、彼らがたどり着いた真実とは・・・？

次回、「Aからの再スタート／白衣の天使は真つ赤に染まる」

「『天使のドーパント』の正体は、あなたですね？」

これで決まりだ！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6121o/>

---

仮面ライダー電王×侍戦隊シンケンジャー

2011年10月6日04時10分発行